資料

丹後田辺藩裁判資料（一）

裁判史研究会
代表　井ケ田良治

目次

はしがき
A　訴状及び判決諸簿冊
A3　文政十一戊子年十一月四日　魚屋町菊蔵外弐人丹波町孫助江疵為負候吟味一件〔十二月十八日落着〕
A5　文政十一戊子年十二月十三日　布敷村定右衛門同村定治跡式出入〔丑正月廿日裁許〕
A6　文政十一戊子年十二月廿三日　京都相国寺門前九軒町山城屋喜兵衛相手和江村太右衛門田地不差戻出入〔丑二月九日済〕

はしがき

丹後田辺藩というのは、現京都府舞鶴に居城のあった三万五千石の藩のことである。もともと丹後は細川忠興が天正八（一五八〇）年から一二万石余を支配していたが、慶長五（一六〇〇）年に京極高知が入部し、一二万三千二百石を領して田辺城（舞鶴）に住した。その子高広は元和八（一六二二）年、田辺三万五千石を弟高三に、弟高通に峰山一万石（旧知と合わせて一万三千石）を分与した。こうして京極氏の分家高三を祖とする丹後田辺藩が成立したが、その間三代目の藩主高盛は弟高門に三千石を分与したので、藩の高は残りの三万三千石となった。寛文八（一六六八）年、藩主京極高盛が但馬豊岡に転封になった跡へ、牧野親成が摂津・河内より入封して三万五千石を領し、その子孫代々が領主として明治初年までつづいた。ここに紹介するのはこの牧野家の丹後田辺藩の裁判資料である。本資料は

牧野家ゆかりの某家にあったものが、昭和二八（一九五三）年の洪水で浸漬し、解続不可能となったものが廃棄されたのち、故あって綾部市立図書館に寄贈になったものであり、残存資料三三二点で元々の通算番号でみると本来の簿冊のほぼ半数に当たると思われる。綾部市史談会に所属しておられ、何鹿郡の百姓一揆の研究で有名な郷土史家加藤宗一氏と梅原三郎氏とによって、昭和三二（一九五七）年に詳しい目録が作成され公刊されている。

本資料は江戸時代の裁判史の研究にとってまことに貴重な資料でありながら、その内容が紹介されていなかったため、日本法制史の研究に活かされないまま今日にいたっていた。昨年綾部市立図書館にお願いして閲覧した私達は、本裁判資料が質量ともに想像を絶す程優れた内容であることに一驚した。

各一件は、最初の魚屋町菊蔵他弐人の傷害事件の吟味一件に見られるように、文政一一（一八二八）年一一月四日に吟味にとりかかってから一二月一八日に落着するまでの経過と、召喚状・口書・宿預け一札・申渡書・その請書にいたる一切の関係文書とからなり、最後に、それら文書の通数を記し、「右之通一件封置」て奉行とおもわれる立会寺田退蔵と寺井三右衛門の署名がなされている。こうして一件ごとにまとめて保管されていたものを、なんらかの目的で人別帳などの公文書の裏をつかって各件一筆で書き写し、一件づつ綴じて冊子としたのが本資料であり、なかには厚さ四五寸に及ぶ大冊もある。

文化文政期以降にかぎられ、その半分が廃棄されてしまったのは残念であるが、かくも克明に藩の裁判の過程が記録された資料に接したのははじめてである。田辺の牧野藩の職制や制度に関する資料を発見できていないので、裁判にたずさわった人々のあり様がわからないが、資料をそのまま紹介するだけでも学会の今後の研究に益する所大と考え、活字化に踏み切った。

隔月の研究会での読み合わせによってもなかなか解読出来ない部分もある。また、本来なれば、内容を吟味して注ないし解説を加えるべきであろうけれども、十全を期するためには大部の資料の大方を読まなければならず、その結果活字化がさらに遅れることをおそれて、不完全のままあえて公表することにした。

解読にあたった裁判史研究会は、一昨年から集まりをもち、現在は本資料の解読に終始している参加自由の開かれた研究会で、現在の参加者は次の通りである。

井ヶ田良治（同志社大）　牧田　勲（神戸大）
居石　正和（同志社大）　山田　勉（神戸大）
藤原　明久（神戸大）　大平　祐一（立命館大）
村上　一博（神戸大）　橋本　誠一（大阪大）
大竹　秀男（武庫川女子大）　三阪　佳弘（大阪大）

中尾　敏充（近畿大）

最後に、この資料の閲覧と解読は、綾部市教育委員会の御好意と、綾部市中央公民館で資料を管理しておられる楳林誠雄先生の御援助と御協力がなければ実現しなかったであろう。また、加藤宗一・梅原三郎両氏の貴重なお仕事がなかったならば、その所在の手掛りさえ得られなかったことであろう。記して厚くお礼申し上げたい。本資料が、日本の裁判史研究の進展の一助になれば幸いである。

一九八六年七月五日　　裁判史研究会
（代表　井ケ田良治）

A3（表紙）

文政十一戊子年十一月四日

魚屋町菊蔵外弐人丹波町
孫助江疵為負候吟味一件

十二月十八日落着　寺井三右衛門

文政十一戊子年十一月四日吟味ニ取懸ル

（朱書）「寺井掛」
（朱書）「三」魚屋町菊蔵外弐人丹波町孫助江疵為負候吟味

十二月十八日落着

右之趣相聞候付同心共致吟味罷在候旨小頭共申聞候處荒増申口書取差出候付昨日御用番江掛三右衛門入御覧ニ左之通取計ひ可申旨申上置候

一立合寺田退蔵寺井三右衛門公事掛小谷次郎左衛門小頭関根守衛門　梅垣其右衛門　公事掛臼井忠之丞　片山仙蔵　同心出人　塩野佐野

此介
益介

出席

惣年寄　逸見与一左衛門
月行司　本町嘉右衛門
魚屋町年寄　仙左衛門
組頭　与右衛門
丹波町年寄　兵左衛門
組頭　傳兵衛

魚屋町　菊蔵
喜助
丹波町　幸吉

右今四時召出掛三右衛門左之通申渡

申渡　　魚屋町

丸屋与平悴
菊蔵
丹波町
桶屋五兵衛弟
喜助
魚屋町
船屋藤左衛門弟
幸吉
其方共吟味筋有之ニ付菊蔵喜助ハ
手鎖町預ヶ幸吉ハ町預ヶ申付ル
右魚屋町
丹波町
役人
右之通申渡間證文可差出
子十一月
右畢而
魚屋町年寄　仙左衛門
組頭　与右衛門
丹波町年寄　兵左衛門
組頭　傳兵衛
右之者共公事方へ呼出何レも證文被仰付候旨
申渡印形取之差出左之通

差上申一札之事
魚屋町
丸屋与平悴
菊蔵
丹波町
桶屋五兵衛弟
喜助
魚屋町
船屋藤左衛門弟
幸吉
右之者共儀御吟味中菊蔵喜助ハ手鎖之上町内
江御預ヶ幸吉義者是又町内江御預ヶ被仰付候
旨被
仰渡奉畏候若取逃候ハヽ御科可被仰付候仍御
請證文差上申處如件
魚屋町
文政十一戊子年十一月四日　年寄　仙左衛門印
組頭　与右衛門印
丹波町
年寄　兵左衛門印
組頭　傳兵衛印

御奉行所

一丹波町大工孫右衛門悴孫助義昨三日呼出申達候處不快ニ付難罷出旨申出候間其節小頭ども快気次第申出候様為申達置

頭書左之通

（朱書）「十一月四日　御用番主馬殿江掛リ三右衛門上ル」

一魚屋町菊蔵外弐人丹波町孫助へ疵為負候吟味

右者吟味物書面之通ニ御座候

子十一月

子十一月十一日

一左之通差紙遣ス

魚屋町　丸屋与平悴　菊蔵

同町　舟屋藤左衛門弟　幸吉

右之もの共明十二日五時召連可罷出者也

十一月十一日　公事方印

丹波町　桶屋五兵衛弟　喜助

右同文言

十一月十一日同断印

但シ書年寄仙左衛門兵左衛門宛遣ス

年寄
組頭

年寄
組頭

一

子十一月十二日

出席

魚屋町　年寄　仙左衛門　組頭　孫左衛門

丹波町　年寄　兵左衛門　組頭　傳兵衛

菊蔵　子ニ弐拾弐歳　喜助

子ニ拾九歳

右之者共今五時ゟ壱人ツヽ公事方へ呼出シ小谷次郎左衛門忠之丞仙蔵立合同心共より差出候口書之趣を以始末相糺九時元之通帰町申付ル

但シ鎖打外之義者掛りゟ当番之同心へ申付候事

幸吉

子ニ拾九歳

一

右之者九時ゟ同様公事方へ呼出し相糺候処喧嘩之場へ望候儀者喜助同様之趣無相違候付退蔵三右衛門立合出席次郎左衛門小頭守衛門掛リ忠之丞仙蔵同心出人奥村間之助高嶋甚助

魚屋町

年寄　仙左衛門

組頭　孫左衛門

幸吉

右今七時召出掛三右衛門左之通申渡

申渡

魚屋町

船屋藤左衛門弟

幸吉

（朱書）

其方儀手鎖之上尚又町内へ預申付ル

「ジャウ」

右町

役人

右申渡間證文可差出

子十一月

右畢而

魚屋町年寄　仙左衛門

組頭　孫左衛門

右之者共公事方へ呼出證文被仰付候旨申渡印形取之差出ス左之通

差上申一札之事

魚屋町

船屋藤左衛門弟

幸吉

右之もの今日手鎖之上尚又町内江御預ヶ被仰付候旨被仰渡奉畏候若取逃候ハヽ御科可被仰付候仍御請證文差上申處如件

魚屋町

文政十一戊子年十一月十二日　年寄　仙左衛門印

組頭　孫左衛門印

御奉行所

十一月十五日

一丹波町大工孫右衛門悴孫助致快気候旨届出候

十一月十六日

丹波町

大工孫右衛門悴

孫助

右之もの明十七日九時召連可罷出者也

十一月十六日　公事方印

年寄

組頭

十一月十七日

一　丹波町

年寄　兵左衛門

組頭　藤兵衛

孫助

子ニ弐拾三歳

右之もの今九時ゟ公事方へ呼出小谷次郎左衛門臼井忠之丞立合先達而同心共ゟ孫助親類共ニ同人迫為承差出候申口を以相糺七ッ時分帰町申付ル

但孫助義他出は不相成段忠之丞ゟ役人共へ心得申聞置候

十一月十八日

平野屋町

年寄　茂八

組頭　長左衛門

同町

桶屋佐兵衛事

徳助

子ニ弐拾六歳

同町

新右衛門後家

申口認印形取戻ス　いさ

子ニ四拾六歳

東吉原町

肝煎　藤右衛門

組頭　傳右衛門

同町佐助娘

さき

子ニ弐拾歳

右之者共今九時ゟ公事方へ呼出次郎左衛門忠之丞立合相糺

惣方暮時差戻ス
但銘々共両人御代官詰所へ罷出致内聞候

十一月十九日　　魚屋町荘太郎母
まさ

一　右之者方へ去月廿二日夜喧嘩後丹波町桶屋喜助誰も不参哉尋参候旨申之ニ付其節之次第承糺申口認差出候様同町年寄仙左衛門へ忠之丞ゟ申達ス
但即日申口書付以(ママ)組頭半右衛門を以差出請取置

同日　　堀上町たばこや
久兵衛事三左衛門
女房
その

一　右之もの去月廿一日夜丹波町大工孫右衛門悴孫助ニ被相頼竹屋町円満寺屋宇兵衛下女さき与申ものを同人方へ参呼出遣候次第又ハ其夜孫助幷丹波町佐兵衛事徳助日頃心易遊ひニ参候趣申之ニ付両様共承糺申口認差出候様同町年寄宗助へ同人ゟ申達ス
但翌廿日申口書付以年寄同人差出請取置

同日　　平野屋町年寄
茂八
組頭
吉右衛門
同町河内屋藤八事
申口認印形取之　利右衛門
子ニ三十六歳
西吉原町
肝煎　甚右衛門
組頭　嘉兵衛
同町　惣次郎娘
申口認爪印申付ル　その
子ニ二十歳

一　右之者ども今日五時ゟ公事方へ呼出同様立合相糺惣方九ツ時差戻ス

子十一月廿日　　魚屋町年寄　仙左衛門

組頭　弥蔵

同町舟登屋

孫助

右之者今四ツ時ゟ公事方へ呼出次郎左衛門忠之丞立合相糺候處廿二日夜之義者用向有之外へ罷出留主中ニ菊蔵喜助幸吉罷越候趣ハ悴嘉吉ニ承候由申之其節之模様不存由申之付其方ニ而不相決候旨次郎左衛門申渡差戻ス

一　同町鳥屋

申口認印形取之　又右衛門

子ニ四十歳

右之もの相糺九ツ時差戻ス

右町役人共へ

一　右孫助悴嘉吉召連九ツ時罷出候様次郎左衛門申渡差戻ス

一　魚屋町組頭

半右衛門

同町船登屋孫助悴

申口認印形取之　嘉吉

子ニ弐拾壱歳

右之者今日九時過ゟ同様呼出相糺七時過差戻ス

十一月廿日

平野屋町

大工定七

鍵屋長兵衛

右之ものども明廿一日九時召連可罷出者也

十一月廿日　公事方印

年寄

組頭

東吉原町

佐助娘

さき

右之もの明廿一日五半時召連可罷出者也

十一月廿日　公事方印

（朱書）「弐度」

肝煎

組頭

一　十一月廿一日

東吉原町

肝煎　藤右衛門

組頭　吉右衛門
同町佐助娘
申口認印形申付ル　さき
平野屋町
年寄　茂八
組頭　次右衛門
同町
喧嘩場所近所惣代
申口認印形取之　大工定七
鍵屋長兵衛
右之者共昨日相達候通公事方へ呼出相糺候上口書申付差戻ス

十一月廿二日

魚屋町
丸屋与平悴
菊蔵
同町
船屋藤左衛門弟
幸吉
右之ものども明廿三日五半時召連可罷出者也

十一月廿二日　公事方印

（朱書付箋）
惣而印形持参可致旨書添遣ス

丹波町
桶屋五兵衛弟
喜助
同町
大工孫右衛門悴
孫助
右同文言
十一月廿二日同断印

年寄
組頭
平野屋町
桶屋
徳助
右同文言
十一月廿二日同断印

年寄
組頭

十一月廿三日

一　平野屋町　孫助
年寄　茂八
組頭　長左衛門
同町桶屋
申口認印形取之　徳助
右之者今四ッ時公事方へ呼出申口之趣口書申付候段次郎左衛門申渡忠之丞読之きかせ印形取之差戻ス
同日左之通
一　立会退蔵三右衛門出席次郎左衛門小頭守衛門掛り忠之丞仙蔵同心出人梅田秋蔵高嶋甚助
魚屋町　年寄　仙左衛門
組頭　孫左衛門
丹波町　年寄　兵左衛門
組頭　藤兵衛
魚屋町　丸屋与平悴
菊蔵
丹波町　桶屋五兵衛弟
喜助
魚屋町　船屋藤左衛門弟
幸吉
丹波町　大工孫右衛門悴
孫助
其方共申口之趣口書申付ル
（朱書）「口書読之
畢而」
相違無之哉
（朱書）「印形取之　後改役人共印形申付候段認候事」
追而可及沙汰

右之ものとも今九ッ時過召出掛三右衛門左之通申渡
申渡
魚屋町
丸屋与平悴
菊蔵
丹波町
桶屋五兵衛弟
喜助
魚屋町
船屋藤左衛門弟
幸吉
丹波町
大工孫右衛門悴
孫助

十一月

魚屋町

丸屋与平悴　　菊蔵申口

子ニ弐拾弐歳

去月廿二日夜丹波町孫助江疵為負候儀ニ付御吟味ニ御座候

此段親同様肴屋職罷在候然ル處去月廿一日夜兼而密通いたし居候さきニ出逢同道ニ而心易致候平野屋町利右衛門方へ参大工孫助さき江度々密通申懸ケ笄受帰候始末承り訳合有之笄之由承居候付取戻可遣与存平野屋町新右衛門後家いさ方へ参候へとも孫助も居不申喜助ニ可咄与存候折節同町夜番近所ニて出合候付右之次第難相済何れ明晩取戻ニ参り度聞置呉候様申候處喜助義も難相許由申聞候間明晩参り可咄由申聞相別れ翌廿二日夜丹波町髪結市右衛門方ニ喜助居候付呼出し只今可参旨申聞喜助同道参り懸ケ候處同町幸吉ニ出合候故少し物を取戻ニ参候間参呉候様申候處同人者髪も為結外ニ用事も有之由申候へとも格別手間取ハ不申先参呉候様申聞三人連右利右衛門方へ立寄前書之訳合幸吉へ荒々致咄候上罷出喜助幸吉ハ夜番之側ニ残し置前書新右衛門後家方門口ゟ相考候處孫助外ニも人居申候様子ニ付難這入イミ罷在候處竹屋町魚屋吉右衛門方ニ居申候その通合せ候付相頼孫助を呼出貫私聲懸ケ由三郎横溝端へ参り互ニすわり対談及懸ケ候處孫助儀私膝へ手をつき候付不相済与存同人之頭を手ニ而打候處たぶきへ手を懸ケ候故摑合イ擲き合ひ与相成下駄ニ而打たゝき喜助幸吉も懸り呉候上孫助をこかン懸ケ候所を跡ゟ喜助つき候付孫助ハ下た与成私ともニ溝端へ倒レ互ニ髪ハ不放サ候故孫助頭を溝縁へすり付ケ候処孫助人殺与聲上ケ候付是ハ与存候へとも何分髪を不放候付放呉候様申聞候處尚亦両人擲キ候故放候所へ近所之もの大聲ニ而何事ニ哉与申なから罷出候ニ驚キ三人共逃去候跡ゟ孫助追欠候へとも見向キも不致北浜へ行舟登屋孫助方へ私幸吉逃込候而腰掛ケ罷在候處へ右孫助嘉吉帰り喜助も逃参候付互ニ申間敷与申合両人ハ先へ帰り私義ハ鳥屋又右衛門方へ参り五六日斗罷在候處御吟味ニ成候儀之旨申上候付被仰聞候者密通いたし候さきへ孫助密通申懸ケ笄取帰候段承り取戻可遣与存候由者申口意之儀既ニ喜助へ相咄幸吉も参呉候様相頼同道いたし罷越孫助へ対談之上互ニ打合一同孫助を及打擲数ケ所打疵付候故疵中所もさわぎ候始末ニ相成候段畢竟右笄ヲ趣意ニいたし喧嘩致懸ケ候儀与相聞不届之旨御吟味請可申上様無御座候

（朱書）「夜歟」

右之通相違不申上候、以上

子十一月廿三日　　菊蔵印

御奉行所

右之もの申上候趣私共も罷出承知仕候依之奥書を以申上候

以上

魚屋町

年寄　仙左衛門印

組頭　孫左衛門印

丹波町

桶屋五兵衛弟

徳蔵事

喜助申口

子ニ拾九歳

去月廿二日夜丹波町孫助へ疵為負候儀付御吟味ニ御座候

此段兄ニ懸り桶屋職仕罷在候然ル處去月廿一日夜平野屋利右衛門方へ参り菊蔵ニ出合候處孫助さきへ密通申懸ケ笄を取帰候間新右衛門後家いさ方へ参候へとも孫助不居合候間明晩取戻しニ可参之間相頼候旨申聞相別レ翌廿二日夜市右衛門方ニ而髪月代致居候處菊蔵参り喜助居候哉と申ニ付直ニ出菊蔵与連立参懸ケ候處幸吉ニ逢菊蔵咄いたし利右衛門方へ立寄笄取ニ参候段菊蔵ゟ幸吉へ相咄罷出私幸吉ハ夜番

之近所ニ扣罷菊蔵ハ新右衛門後家方ゟ孫助呼参溝端ニ両人居り対談いたし候處私幸吉ハほつかむり仕其後ロニ立廻り承り罷在無程両人摑ミ合ニ相成候間幸吉私手ニ而擲懸り菊蔵孫助ハ互ニ髪を摑ミ合擲合罷在菊蔵孫助をこかし懸ケ候處私菊蔵を後ロゟ突候得者両人一所ニ溝端へこけ候處幸吉両人とも手ニ而擲罷在候處孫助人殺与聲上ケ候へとも同人儀菊蔵を不放サ尚又孫助を擲候所髪を放シ候故菊蔵を起し遣候處へ近所之もの大聲懸ケ罷出候付一同逃行跡ゟ孫助追欠候へとも見向も不致逃延候而利右衛門方へ参り相尋候へとも不参由申ニ付北浜まさと申もの方へ参り候へとも是又不参由申ニ付舟登屋孫助方へ参り候處悴嘉吉女子一人罷在菊蔵幸吉腰掛罷在必申呉間敷段菊蔵申聞如何様之義有之候とも申間敷趣申合菊蔵者跡ニ差置幸吉私罷帰候處御吟味ニ相成候儀之旨申上候付被

仰聞候者さきへ孫助密通申掛ケ笄持帰候付取戻可遣間其節参呉候様菊蔵ニ被相頼立別レ候ハヽ勘弁之上取斗方も可有之儀之處最初同意いたし翌夜同道罷越シ菊蔵孫助対談之様子幸吉倶々立廻り承り両人摑合罷在候節一同ニ掛り打擲致シ孫助数ケ所打疵請所も騒候始末ニ致成候段不届之旨御吟味請可申上様無御座候

右之通相違不申上候已上

子十一月廿三日　　喜助印

御奉行所

右之者申上候趣私共も罷出承知仕候依之奥書を以申上候已上

丹波町

年寄　兵左衛門印

組頭　藤兵衛印

魚屋町

船屋藤左衛門弟

幸吉申口

子ニ拾九歳

去月廿二日夜丹波町孫助へ疵為負候儀ニ付御吟味ニ御座候

此段兄ニ懸り看屋職仕罷在候然ル處去月廿二日夜五時分与覚髪月代為致度存髪結市右衛門方へ参候途中菊蔵喜助ニ出合候處少し物を取戻しニ参度候間参呉候様菊蔵申ニ付髪結外ニ用事も有之段申聞候へとも格別手間取候儀ニも無之喜助も頼置候間只今参呉候様申ニ付左候ハヽ可参与市右衛門へハ門口ゟ約束致置三人連立利右衛門方へ同様立寄候處菊蔵申聞候ハ笄取戻ニ可参若孫助与喧嘩ニ可相成も難斗間頼候趣申ニ付同道いたし夜番之近所ニ喜助同様罷在菊蔵義ハ孫助呼出参候上由三郎横溝端ニ而両人すわり対談仕候を私喜助ハほつかむり仕後ロゟ覗見候處孫助後ロを見候付両方へ別れ候處両人之者掴ミ合之間私喜助取懸り手ニ而擲候處を誰ニ歟面体を被打目もくらミ倒候付後ロ之方ニ而目をぬぐひ居申候内孫助菊蔵溝端へ倒レ候處人殺与聲上ケ候付参呉候様申候間面体之痛をこらへ取懸り手ニ而打喜助私菊蔵を起し遣候處近所ゟ大聲ニ而罷出候故跡をも不見して三人共逃去菊蔵私両人ハ舟登屋孫助方へ参り腰掛ケ罷在候所喜助も参り候間必他言申間敷旨申合私義者面体も痛候付両人ハ残置帰候處御吟味ニ相成候儀之旨申上候付被仰聞候者用事有之罷出候途中菊蔵ニ出逢候處物取ニ罷越候間参呉候様相頼候上さき笄孫助持帰取戻シ遣候儀ニ付喧嘩ニ可相成も難斗候旨申聞候ハヽ取鎮方勘弁も可有之筈之處既ニ両人掴合候節喜助倶々打懸り孫助数ケ所打疵請所も騒シ候始末ニ致成し候段不届之旨御吟味請可申上様無御座候右之通相違不申上候已上

子十一月廿三日　　幸吉印

御奉行所

右之もの申上候趣私共も罷出承知仕候依之奥書を以申上候以上

年寄　仙左衛門印

組頭　孫左衛門印

丹波町

大工孫右衛門悴

孫助申口

子ニ弐拾三歳

去月廿二日夜菊蔵外両人ニ疵被付候儀ニ付御吟味ニ御座候

此段親同様大工職仕罷在候然ル處円満寺屋宇兵衛下女さきへ密通之儀毎々申懸ケ候得とも何迚も聢与返答不仕候間去月廿一日夜働先ゟ帰懸ケ兼而知ル人堀上町三左衛門女房そのを相頼呼出し貰何ッ迚も聢与返事も不致今夜者何レとも可承与申聞候處無拠外ニ懸り合有之故ニ候得とも其内ニ者如何様とも可致旨申付何ゾ印ニ而も無之候而者合点難成段理詰在候處困り候躰ニ而うつむき候間其笄可持帰参り呉候節可相渡段申聞私抜取相別れ前書三左衛門方へ罷越候處無程桶屋徳助参り候間右之趣相咄候處其女者丸屋菊蔵懸り合之趣ニ候へ者承り候ハヽ何様之儀仕出し候儀も難斗間任せ候様申候付左候ハヽ宜頼候段申聞候處直同人罷出候付跡ニ罷在候處無程罷帰能様ニ取斗置候旨申聞候間安堵いたし罷帰翌廿二日夜者平野屋町新右衛門後家いさ方へ参少し内咄仕帰懸ケ候處門口ゟ女之聲ニ而呼出し候間無何心罷出候處

女者先へ立参り跡ゟ聲懸ケ候付立留り候處菊蔵ニ而此先へ参呉候様申聞平野屋町花や由三郎横溝端へ参り互ニすわり菊蔵申聞候者此方之女をせこめ笄取帰候段難相済趣申ニ付其儀ニ者訳有之不物語候てハ不相分旨申候處同人儀雑言而己申聞手ニ而頭を擲キ候間其手をとらへ先つ可申訳も不糺理不尽之儀致候而ハ相済間敷訳聞候上不調法ニ候ハヽ何レとも可致段申聞候處猶々雑言申聞及打擲候付私儀も残念ニ存掴ミ合候處其辺うろ付罷在候晒手拭かむり候男両人掛り打擲仕溝端江打倒し候付気も取昇せ所詮不叶与存人殺与聲上ケ候處皆々逃去候間跡ゟ追欠参候様ニハ覚候へとも右加勢仕候もの并宿へ帰候儀も与碇不覚親どもニ被叱医師薫蔵ニ療治請候儀を薄々覚罷在候儀ニ而夢中之如くニ候處翌朝徳助方へ右さき参り前書笄之儀決而申呉間敷段被申聞候處昨夜之次第ニ相成気之毒ニ而無言葉誤入候何分致用捨呉候様申聞候由徳介ゟ承り其後笄之儀者以同人さき方へ差戻候儀ニ而前書菊蔵外両人ハ喜助幸吉ニ有之段ハ跡ニ而承り候儀之旨申上候付被

仰聞候者兼而菊蔵密通いたし居候さきへ強而密通申掛笄取帰候を不宜儀与徳助心附同人へ任せ事済候段承り候ハヽ早速笄も可差戻筈之處無其儀段不行届菊蔵雑言申聞打懸り候とも致方も可有之處残念ニ存候迚互ニ掴ミ合候故終ニ疵請

ケ夜中及騒動候始末ニ相成候段不心得之旨御吟味請可申上
様無御座候
右之通相違不申上候以上
子十一月廿三日　孫助印
御奉行所
右之もの申上候趣私共も罷出承知仕候依之奥書を以申上候
以上
丹波町
年寄　兵左衛門印
組頭　藤兵衛印
東吉原町
佐助娘
さき申口
子ニ弐拾歳
（朱書）
於公事方ニ申口認直ニ
印形取之候分左ニ記ス
去月廿二日夜魚屋町菊蔵外両人丹波町孫助ニ疵為負候一件引合
候儀有之御吟味ニ御座候
此段私儀当九月ゟ竹屋町円満寺屋宇兵衛方ニ致奉公罷在候
然ル處去冬ゟ丹波町孫助度々蜜通之儀申懸ケ候得とも兼而
菊蔵与蜜通いたし罷在候故其通ニも難成日を送罷在候處去
月廿一日夜女之聲ニ而主人宇兵衛門口ゟ呼出候付罷出候處
女者見へ不申孫助罷在兼々申置候儀何れとも返答可承旨申
聞候付外ニ懸り合之男有之無拠返事ニも及兼候段申聞候處
其儀も承知之由ニ而強而申ニ付主人之近所殊ニ帰候儀も逢
成兎や角案事致方も無御座候付何れとも可致段申候處証拠
渡候様申候へとも何ニも無之段申候處其笄を渡段乍申抜取
帰候間其笄ハ訳合有之段可申与存候處直ニ罷帰候付其訳も
得与不申聞帰候而無程風呂へ可参与存桶屋佐兵衛出違ニ主
人方を罷出兼而知ル人竹屋町横町家名も不存女房しけ方へ
立寄風呂へ参候處人多キ様子ニ付内へハ不入下モへ下り候
途中右佐兵衛ニ出合候處先程孫助笄を取帰候趣菊蔵へ相知
レ候而者不宜決而不申呉候様申聞笄も持可参筈之處急き致
失念候間跡ゟ可戻由申ニ付立別れ利右衛門方へ立寄候處同
人義旁罷在何ゾ用事有之候旨申聞候間菊蔵江逢度儀も候へ
とも格別之用も無之旨申帰前書しけ同道風呂ニ入帰候處主
用有之罷出帰懸ケ菊蔵ニ出合直ニ同道ニ而利右衛門方へ参
候上前書孫助ニ逢候節之始末も相咄主人方へ罷帰廿二日夜
之次第ハ一向不存候處四時過と覚右しけゟ承り驚入翌廿三
日朝早速佐兵衛方へ罷越前夜之次第気之毒ニ存無面目候間
何卒致了簡呉孫助へも宜断申呉候様頼置罷帰候處主人方ゟ
暇を請親佐助方へ戻り罷在候處其後佐兵衛笄致持参呉候儀
之旨申上候付被

仰聞候ハ宇兵衛方ニ奉公いたし候中菊蔵与蜜通いたし罷在孫助蜜通申懸ケ候上笄取帰候を佐兵衛ニ被頼他言致間敷段承知いたし候ハヽ假令菊蔵相尋候とも申間敷筈之處申明し候故菊蔵憤り孫助疵受候始末ニ相成旁不埒之旨御吟味請可申上様無御座候

右之通相違不申上候已上

子十一月廿一日　　さき爪印

御奉行所

右之もの申上候趣私共も罷出承知仕候依之奥書を以申上候以上

東吉原町
肝煎　藤右衛門印
組頭　吉右衛門印

平野屋町
喧嘩場所
近所惣代
大工
定七
子ニ五拾壱歳
鍵屋

長兵衛
子ニ四拾九歳
右申口

去月廿二日夜魚屋町菊蔵外両人丹波町孫助江疵為負候一件引合候儀有之御尋ニ御座候

此段定七長兵衛申上候去月廿二日夜五ツ時頃与覚近所ニ而人殺与申もの有之ニ付何者歟与聲懸ケなから罷在候處花屋由三郎蔵之横ゟ居町下モへ逃去候者有之追欠参夜番之明りニ而すかし見候處聢与ハ不分三人斗与存候所へ壱人髪をさばき参候付聲懸ケ立寄見申候處大工孫右衛門悴孫助ニ而惣身泥付面躰頭等血ニ染ミ罷在候付如何之儀ニ候哉相尋候處丸屋菊蔵ケ様ニいたし候間此躰を親へ為見候而筋合分ケ貰度由申ニ付直ニ場所吟味仕候處下駄片シ溝ニ有之候を引上ケ見候處へ近所之もの追々集り候へとも外ニ刃物等も無之溝端ニ血も付キ有之相手ハ逃去り候事故孫助儀者親孫右衛門方へ連参候儀ニ而前書之外見聞仕候義も無御座候

右之通相違不申上候已上

子十一月廿一日　　定七印
長兵衛印

御奉行所

平野屋町
桶屋佐兵衛事
徳助申口
子弐拾六歳

去月廿二日夜魚屋町菊蔵外両人丹波町孫助へ疵為負候一件引合候儀有之御吟味ニ御座候

此段私儀桶屋職仕家内三人相暮罷在候然ル處去月廿二日夜兼而心易いたし候堀上町三左衛門方へ参候處丹波町孫助居合申聞候ハ円満寺屋宇兵衛下女さきへ蜜通之義申懸ケ置候處与聢返事も不致ニ付承知いたし候ハヽ可戻旨申聞笄を取帰候趣申候付丸屋菊蔵掛合之由承り罷在彼是有之候而者不宜段申聞候處□□□候上ニ而之儀ニ候間宜頼候旨孫助申聞候間直ニ宇兵衛方へ参り候處右下女ハ近所へ出候由ニ而無便方平野屋町を下り候處右女へ出逢候間孫助申聞候趣を以相頼候處相知レ候而ハ同様不宜候間他言ハ致間敷序之節右笄戻呉候様申候付又々三左衛門方へ参り其段孫助へ申聞罷帰候處翌廿二日夜孫助打擲ニ逢候趣跡ニ而承り早速見舞ニ参帰り候儀ニ而廿三日朝右さき参り夜前之始末何とも気之毒之趣申候付訳而相頼承知いたし候儀何とも不相済趣申聞候處さき赤面いたし罷帰候付其後承り候處菊蔵ニ問詰られ無是非申候由ニ付其段孫助へも申聞候儀ニ而右笄ハ其後同人ゟ請取さき親佐助方へ持参候處親類之者も居合候間さきへも逢其段申聞相渡帰候儀ニ御座候

右之通相違不申上候已上

子十一月廿三日　　徳助印

御奉行所

平野屋町
河内屋藤八事
利右衛門申口
子ニ三拾六歳

去月廿二日夜魚屋町菊蔵外両人丹波町孫助江疵為負候一件引合候義有之御吟味御座候

此段私儀日雇抒在通ひ仕家内三人相暮罷在候然ル處去月廿一日抒ニ罷出候留守中日暮過さき参菊蔵参候ハヽ逢申度段申呉候様女房へ申置罷帰候跡へ菊蔵罷越右之段女房申聞候處風呂へ可参旨申罷出無程右さき同道ニ而参り裏へ出何歟咄いたし直ニ両人とも帰候後丹波町喜助参候所へ又々菊蔵罷越何歟致咄罷帰候儀ニ而添乳いたしなから笄与歟申儀者承候得とも小聲ニ而申候間其余者聞へ不申翌廿二日夜も同様宿ニ居不申處宵ニハ菊蔵参其跡ゟ喜助幸吉罷越何歟咄候

上罷出五ツ半時分ニも候哉又々喜助門ドより菊蔵者不参候哉相尋候付相見不申由申候處直ニ罷帰候段女房申聞候付尚与得承糺候得ども右之外ニ者何事も不存由申聞候義ニ而此外之儀者承り候儀も無御座候

右之通相違不申上候以上

子十一月一九日　　利右衛門印

御奉行所

平野屋町
鍛治
新右衛門後家
いさ申口
子ニ四拾六歳

去月廿二日夜丹波町孫助江魚屋町菊蔵外両人疵為負候一件引合候儀有之御吟味ニ御座候

此段壱人暮ニ而賃仕事仕罷在平生近所へ用向ニ罷出候節夜分ハ明り付置罷出留守ニ而も平生心安キものハ留守旁差置罷出候而其夜ハ近所司甫方ニ仏事有之参居候付留守中誰参候哉も存不申候喧嘩いたし候趣も承り五時分と覚宿へ罷帰候得とも何事も一向存不申候儀ニ御座候

右之通相違不申上候已上

子十一月十八日　　いさ印

御奉行所

西吉原町
惣次郎娘
その申口
子ニ弐拾歳

去月廿二日夜魚屋町菊蔵外両人丹波町孫助江疵為負候一件引合候儀有御吟味御座候

此段竹屋町魚屋吉右衛門方ニ被雇罷在候中去月廿二日夜使ニ参り候途中兼而知ル人菊蔵ニ出合候處新五郎方ニ孫助罷在候間鳥渡呼出呉候様申候付無何心呼出シ置直ニ吉右衛門方へ罷帰候儀ニ而此外之儀者何事も承候儀無御座候

右之通相違不申上候、以上

子十一月十九日　　その爪印

御奉行所

魚屋町
船登屋
孫助悴
嘉吉申口

子ニ弐拾壱歳

去月廿二日夜魚屋町菊蔵外両人丹波町孫助江疵為負候一件引合候儀有之御吟味ニ御座候

此段親同様肴屋職仕罷在候然ル處去月廿二日夜風呂へ参四時分与覚喧嘩有之趣途中ニ而承り罷帰候處菊蔵幸吉私宅上り口ニ腰掛ヶ黙き勘心之躰ニ而罷在喧嘩之咄者無之哉之旨相尋候間平野屋町者騒動いたし候段申聞候處喜助も参候付喧嘩致候者ハ難差置帰呉候様申聞候處喜助幸吉者罷帰菊蔵者難帰由申居候處へ鳥屋又右衛門参連レ帰候付私儀も近所之事故菊蔵親与平方へ見舞ニ参候儀ニ而外ニ承候儀も無御座候

右之通相違不申上候以上

子十一月廿日　　嘉吉印

御奉行所

魚屋町

鳥屋　又右衛門申口

子ニ四拾歳

去月廿二日夜魚屋町菊蔵外両人丹波町孫助江疵為負候一件引合候儀有之御吟味ニ御座候

此段私儀肴屋職仕家内三人相暮罷在候然ル處去月廿二日夜四時過与覚私従弟与平方ゟ呼ニ遣候間早速罷越候處親類近所も寄集居申与平申聞候ハ悴菊蔵儀致喧嘩人をあやめ候由ニ付勘当可然趣ニ而彼是申罷在候付所詮菊蔵寄せ付候様子無之候付罷帰定而舟登屋孫助方ニ可罷在与存参候處同人悴嘉吉菊蔵外ニ近所之者も罷在候付宅へ候(ママ)者不被帰候間私方へ可参旨申聞菊蔵を連帰置直ニ親類同道丹波町孫右衛門方へ参今夕之次第気之毒之旨申入候處親類打寄罷在挨拶之上孫右衛門申聞候者悴孫助義者親類孫左衛門方へ連行候趣ニ而同人方ニ而療治致候趣孫右衛門申聞候間直ニ孫左衛門方へ参候處医師ゟ親類之者へ疵為見候上ならてハ療治難致由申候付親類打寄疵見申候上療治受候儀ニ付暫罷在孫左衛門へも及挨拶置罷帰菊蔵義者私方ニ五六日差置候内御吟味ニ付其節より親与平方へ差戻候儀ニ而此外之義者承り候儀も無御座候

右之通相違不申上候以上

子十一月廿日　　又右衛門印

御奉行所

前記有之役人共上ニ而承糺申口認差出候写

乍恐口上之覚

一去廿二日夜喧嘩後私方へ喜助参り唯太郎（荘ノ脱カ）参不申哉与尋候へ
とも唯茂（誰カ）参り不申候夫ハ孫助方ニ而も御尋候様其外之義者
何事も存不申候

魚屋町荘太郎母
十一月十九日　まさ印

右同断
乍恐口上覚

堀上町三左衛門
妻
その

一右之者竹屋町円満寺屋長兵衛（ママ）下女呼出候趣相尋候處同人申候
者丹波町大工孫助途中ニ而出合右之女呼出し呉候様相頼候處
勤居候家も不存女之名等茂不存候段申候へハ孫助申候者同道
ニ而可参旨申候付右同人案内ニ而下女呼出し帰宅仕候其夜徳
介孫助参候由申候付両人之もの咄合ニ而も致候哉其段承り候
ハヽ不隠可申旨申候所その申候ハ右両人店之方ニ而何やらん
咄合候得共その之事奥ニ居申候間咄之始末一向聞取不申段申
候右之段相糺候處相違無御坐趣ニ御坐候以上

堀上町年寄　宗助印

文政十一年戊子十一月廿日

公事方
御役所

子十一月晦日

魚屋町菊蔵外弐人丹波町孫助へ疵為負候一件吟味伺書并御
仕置附書付壱通類例壱通相添掛り三右衛門主馬殿江上ル

同十二月十四日

魚屋町
丸屋与平悴　菊蔵
同町
舟屋藤左衛門弟　幸吉

右之もの明十五日四時召連可罷出者也
十二月十四日　公事方印

丹波町
桶屋五兵衛弟　喜助

年寄
組頭

右同文言

十二月十四日　右同断印

年寄
組頭

子十二月十五日

一立合退蔵三右衛門出席次郎左衛門外例之通り

魚屋町年寄　仙左衛門
丹波町組頭　傳兵衛

右之者今四ツ時召出掛三右衛門左之通申渡

申渡

魚屋町　丸屋与平悴　菊蔵
丹波町　桶屋五兵衛弟　喜助
魚屋町　舟屋藤左衛門弟　幸吉

其方共手鎖はづし尚又預ケ申付ル

右町役人

右申渡間証文可差出

十二月

畢而右同様公事方へ呼出次郎左衛門掛り両人立合請証文取之左之通

差上申一札之事

魚屋町　丸屋与平悴　菊蔵
丹波町　桶屋五兵衛弟　喜助
魚屋町　舟屋藤左衛門弟　幸吉

右之もの共今日手鎖御はづし尚亦御預ケ被仰付奉預候若取逃候ハヽ御科可被仰付候仍御請証文差上申處如件

魚屋町年寄　仙左衛門印

文政十一戊子年十二月十五日

丹波町組頭　　傳兵衛印

御奉行所

（朱書）「子十二月十日主馬殿江上ル」　寺田退蔵　寺井三右衛門

先達而相伺候魚屋町菊蔵一件之儀差当候御定類例も無御座利吉ハ格別品重く殊ニ今度之一件ハ元より趣意も軽候得バ相伺候趣ニ而ハ御仕置重く却而孫助御咎軽キ方ニハ無之哉之旨御尋ニ御座候

此儀御尋之趣を以評議仕候處趣意ハ軽くも相聞候得共一体此もの共ハ平日喧嘩等を好夜中町方を徘徊いたし風俗悪敷趣兼々相聞捨置候ハヽ取締方も不宜間急度可申付哉与評議も仕候折柄右及始末候儀ニ而尤外ニも同様之もの有之今度吟味ハ相詰参申候へとも既ニ御料所之御取扱ニも悪党有之及狼藉難捨置候付悪事いたし候を幸ニ所拂ニも可相伺候ハヽ平日身持ヶ様ニ而度々所を為騒候と申文言有之候へハ所拂之刑ニ相当候由ニ付其趣を以御取斗有之似寄候もの共ニ而菊蔵ハ喧嘩之当人ニ候故右を以旁所拂ハ難遁哉ニ奉存候間敲ニ不及所拂申付外両人も右ニ准シ尚又軽可申付筋ニ候へ共人ニ疵付候もの等所拂ゟ軽キ相当之御咎ハ無御座二重御仕置ニ過料之上戸〆手鎖之御定相見候差別を以喜助ハ過料銭五貫文之上三十日手鎖幸吉ハ同三貫文之上三十日手鎖申付孫助ハ急度叱り置さきハ女之義ニ付叱り置候方ニ可有御座哉ト奉存候

（朱書）「手鎖日数中如何様之訳を以願筋有之候とも宥免之沙汰ニハ及間敷候」右評議仕候趣書面之通ニ御座候以上

十二月

（朱書）「子十二月十四日主馬殿へ上ル」　寺田退蔵　寺井三右衛門

魚屋町菊蔵一件御仕置之儀先達而評議仕申上候處右ハ相当ノ例も不相見間尚一応評議いたし可申上旨被仰聞候

此儀評議仕候處人ニ疵付候者之御仕置品々
も御坐候得とも何レも趣意違相当之例相見
不申尤右様之もの所拂ゟ軽キ御仕置ハ相見
不申候へとも尚又評議仕候處孫助疵所も平
愈いたし片輪ニも不相成候間差当例ハ無御
坐候へとも此故を以菊蔵ハ過料五貫文之上
三十日手鎖申付喜助幸吉ハ俱々打擲いたし
候迫之ものニ付右ニ准シ両人とも三十日押
込申付此外之儀ハ先達而評議仕申上候通ニ
而可然哉ニ奉存候
右再応評議仕候趣書面之通ニ御坐候以上
十二月
寺田退蔵
寺井三右衛門
江
（朱書）
「子十二月十六日御下知書御渡左之通」
寺田退蔵
寺井三右衛門
掛
魚屋町
丸屋与兵衛悴
菊蔵
過料五貫文之上
三十日手鎖

丹波町
桶屋五兵衛弟
徳蔵事
喜助
三十日押込
魚屋町
船屋藤左衛門弟
幸吉
右同断
丹波町
大工孫右衛門悴
孫助
急度叱り
東吉原町
佐助娘
さき
叱り
右之通御咎可被申渡候
子十二月
子十二月十七日
魚屋町
丸屋与平悴
菊蔵
丹波町

桶屋五兵衛弟
喜助
魚屋町
舟屋藤左衛門弟
幸吉
右町役人
惣年寄
月行司
右之者とも明十八日五ッ時御用
十二月十七日
右之通相達候様掛三右衛門小頭ニ申達書付相渡
子十二月十八日
一立会退蔵三右衛門出席次郎左衛門小頭両人掛両人同心出人関
根守一塩野此助
惣年寄
逸見与一左衛門
月行司堀上町年寄
宗助
魚屋町年寄
仙左衛門

組頭　半右衛門
丹波町年寄
兵左衛門
組頭　傳兵衛
平野屋町
組頭　次右衛門
東吉原町肝煎
藤右衛門
組頭　藤四郎
西吉原町
組頭　嘉兵衛
右之者共今五時過召出掛三右衛門左之通申渡
申渡
魚屋町
丸屋与平悴
菊蔵
其方儀密通いたし候さき江孫助密通申掛ケ笄取帰候段
承り取戻可遣与存候由者申口通之儀既ニ喜助江相咄幸
吉も参り呉候様相頼同道いたし罷越し孫助江対談之上
互ニ打合一同孫助を及打擲数ケ所打疵付候故夜中所も
騒キ候始末ニ相成候段畢竟右笄を趣意ニいたし喧咤致

懸ケ候儀与相聞不届ニ付御仕置可申付處孫助疵所も平愈いたし片輪ニも不相成間過料銭五貫文之上手鎖申付ル

丹波町
桶屋五兵衛弟
徳蔵事
喜助

其方儀さきへ孫助蜜通申掛ケ笄持帰候付取戻可遣旨其節参呉候様菊蔵ニ被相頼立別れ候ハヽ勘弁之上取計方も可有之儀之處最初ゟ同意いたし翌夜同道罷越し菊蔵孫助対談之様子幸吉倶々立廻り承り摑合罷在候節一同ニ掛り打擲いたし孫助数ケ所打疵請ケ所も騒候始末ニ致成候段不埒ニ付押込申付ル

魚屋町
船屋藤左衛門弟
幸吉

其方儀用事有之罷出候途中菊蔵ニ出逢候處物取ニ罷越候間参呉候様相頼候上さき笄孫助持帰取戻遣候儀ニ付喧嘩可相成も難計候旨申聞候ハヽ取鎮方勘弁も可有之筈之處既ニ両人摑合候節喜助倶々打懸り孫助数ケ所打疵受ケ所も騒シ候始末ニ致成候段不埒ニ付押込申付ル

丹波町
大工孫右衛門悴
孫助

其方儀兼而菊蔵蜜通致シ居候さき江強而蜜通申掛笄取帰候を不宜儀与徳助心付同人江任せ事済候段承候ハヽ早速笄も可差戻筈之處無其儀段不行届菊蔵雑言申聞打懸り候とも致方も可有之處残念ニ存候迚互ニ摑合候故終ニ疵請夜中及騒動候始末ニ相成候段不心得ニ付急度叱り置

東吉原町
佐助娘
さき煩付代
嘉七

其方儀宇兵衛方ニ奉公いたし候中菊蔵与蜜通いたし罷在孫助蜜通申懸ケ候上笄持帰候を徳助ニ被頼他言致間敷段承知いたし候ハヽ假令菊蔵相尋候共申間敷筈之處申明し候故菊蔵憤り孫助疵請候始末ニ相成旁不埒ニ付叱り置

一先達而吟味ニ付呼出候もの共者無構間其旨可申通
右申渡趣一同証文申付ル
十二月

一右畢而前記魚屋町年寄仙左衛門ゟ西吉原町組頭嘉兵衛迚公事方へ呼出し請書被仰付幷菊蔵儀過料銭ハ三日之内役所へ可相納旨被仰渡請書為読聞印形取之左之通

但月行司ハ出席斗請書印形ハ不申付

差上申一札之事

魚屋町菊蔵外弐人丹波町孫助江疵為負候一件再応御吟味之上左之通被仰渡候

一菊蔵儀蜜通いたし候さき江孫助蜜通申掛ケ笄取帰候段承り取戻可遣与存候由者申口通之儀既ニ喜助へ相咄幸吉も参呉候様相頼同道いたし罷越孫助江対談之上互ニ打合一同孫助を及打擲数ケ所打疵付候故夜中所も騒ギ候始末ニ相成候段畢竟右笄を趣意ニいたし喧嘩致懸候儀与相聞不届ニ付御仕置可被仰付処孫助疵所も平愈いたし片輪ニも不相成間過料銭五貫文之上手鎖被仰付候

但過料銭ハ三日之内御役所江可相納旨被仰渡候

一喜助儀さき江孫助蜜通申掛ケ笄持帰候付取戻し可遣間其節参呉候様菊蔵ニ被相頼立別レ候ハヽ勘弁之上取計方も可有之儀之處最初ゟ同意いたし翌夜同道罷趣し菊蔵孫助対談之様子幸吉俱々立廻り承り両人□□（摑）（合）罷在候節一同ニ掛り打擲いたし孫助数ケ所打疵請所も騒候始末ニ致成候段不埒ニ付押込被仰付候

一幸吉儀用事有之罷出候途中菊蔵ニ出逢候處物を取ニ罷越候間参呉候様被相頼候上さき笄孫助持帰取戻遣候義ニ付喧嘩ニ可相成も難計候旨申聞候ハヽ取鎮方勘弁も可有之筈之處既ニ両人摑合候節喜助俱々打掛り孫助数ケ所打疵受所も騒候始末ニ致成候段不埒ニ付押込被仰付候

一孫助儀兼而菊蔵蜜通いたし居候さき江強而蜜通申掛ケ笄取帰候を不宜義と徳助心付ケ同人へ任せ事済候段承候ハヽ早速笄も可取戻筈之處無其儀段不行届菊蔵雑言申聞打懸り候とも致方も可有之處残念存候迚互ニ摑合候故終ニ疵請夜中及騒動候始末ニ相成候段不心得ニ付急度御叱り被置候

一さき儀宇兵衛方ニ奉公いたし候中菊蔵与蜜通いたし罷在笄取帰候を徳助ニ被頼他言致間敷段承知致シ候ハヽ假令菊蔵相尋候とも申間敷筈之處申明し候故菊蔵憤り孫助疵請候始末ニ相成旁不埒ニ付御叱り被置候

一先達而御吟味ニ付被召出候ものども者不埒之筋も無御座一同無御構間其旨可申通旨被仰渡候

右被仰渡候趣一同承知奉畏候若相背候ハヽ御科可被仰付候仍御請証差上申處如件

魚屋町

丸屋与平倅　菊蔵印

文政十一戊子年十二月十八日

丹波町　年寄　兵左衛門印
桶屋五兵衛弟　組頭　傳兵衛印
徳蔵事　東吉原町
喜助印　肝煎　藤右衛門印
魚屋町　組頭　藤四郎印
船屋藤左衛門弟　平野屋町
幸吉印　組頭　次右衛門印
丹波町　西吉原町
大工孫右衛門悴　組頭　嘉兵衛印
孫助印
東吉原町
佐助娘
さき煩ニ付代
嘉七印

御奉行所

前書被仰渡候趣私共も一同罷出承知仕候依之奥書を以申上候
以上

魚屋町
年寄　仙左衛門印
組頭　半右衛門印
丹波町

（朱書）
「御掛リ主馬殿へ上ル」
魚屋町菊蔵外弐人丹波町孫助江疵為負候一件
御咎申渡相済候儀申上候書付
寺田退蔵
寺井三右衛門
御届
寺田退蔵
寺井三右衛門掛

魚屋町
丸屋与平悴
菊蔵
過料五貫文之上
三十日手鎖

丹波町
桶屋五兵衛弟
徳蔵事
三十日押込　喜助
魚屋町
舟屋藤左衛門弟
右同断　幸吉
丹波町
大工孫右衛門悴
急度叱り　孫助
東吉原町
佐助娘
叱り　さき

右御書付之通今日御咎申渡相済申候依之申上候以上
十二月十八日

文政十二己丑年正月十八日

魚屋町
丸屋与平悴
菊蔵
丹波町

桶屋五兵衛弟
喜助
魚屋町
舟屋藤左衛門弟
幸吉
右町役人
惣年寄
月行司

右之もの共明十九日四時御用
正月十八日

右之通相達候様掛三右衛門小頭共へ申達ン書付相渡

丑正月十九日

一立会退蔵三右衛門出席次郎左衛門小頭守衛門其右衛門掛り忠之丞同心出人岡安永助　梅田秋蔵

惣年寄
忌中引込ニ付不罷出　逸見与一左衛門
月行司紺屋町年寄
市兵衛
魚屋町年寄
仙左衛門

組頭　半右衛門　　正月十九日

丹波町年寄　兵左衛門　　一　吟味申口書付　拾四通

組頭　傳兵衛　　但外ニ同心吟味之節申口等書付　九通

菊蔵　　一　手鎖町預ヶ役人一札　三通

喜助　　一　申渡請書　壱通

幸吉

以上

右之者共今四時召出掛り三右衛門左之通申渡

右之通一件封置

文政十二己丑年正月　寺田退蔵

寺井三右衛門

（山田　勉）

申渡

魚屋町

丸屋与平悴

菊蔵

丹波町

桶屋五兵衛弟

喜助

魚屋町

船屋藤左衛門弟

幸吉

其方共儀不埒有之先達而菊蔵（朱書）「ジヤウ」ハ手鎖喜助幸吉ハ押込申付置候（朱書）「メ」處日数相立候（朱書）「タ」付差免（朱書）「ツニ」ス

A5（表紙）

文政十一戊子年十二月十三日

布敷村定右衛門同村定治跡式出入

丑正月廿日裁許　寺井三右衛門

文政十一戊子年十二月十三日出訴

（朱書）「寺井掛」

（朱書）「五」布敷村定右衛門相手同村定治

跡式出入

丑正月廿日裁許

子十二月十日

一右出入之儀大庄屋口上ニ而品々為申聞候へとも難致納得其上出家へ携候趣も相見へ候付差戻候段御代官植木半五へ被届出候付公事宿江罷出願出候様可被申達旨掛三右衛門御代官同人へ申達ス

右之趣被相心得候様小谷次郎左衛門江掛同人ゟ申達ス

子十二月十三日

一今四時訴訟人布敷村定右衛荘（ママ）屋五郎左衛門□□（御用）宿新町茶屋楠右衛門差添左之訴状公事方へ差出候付目安糺之上請取之下ケ置訴状次郎左衛門被差出候間一覧之上明日裏書可被相渡哉之旨被申聞候間可然旨申談置右同様公事方へ呼出し訴状被請取置候間明十四日四時可罷出旨次郎左衛門申達戻ス

訴状左之通

乍恐以書付御訴訟奉申上候

布敷村　百姓　訴訟人　定右衛門

同村　相手　定治

跡式出入

右訴訟人布敷村定右衛門奉申上候私養父道友儀実子も有之候へとも惣領定治与申者道友心躰ニ不能由ニ而別家為致罷在私を聟養子ニ致度旨道友方ゟ親類共を以私実兄大俣村金次郎方江申込熟談之上去ル戊年八月中引越参り則養父道友ゟ御用地并家屋鋪家財等被相譲則譲状外ニ田畑ケ所附帳面共請取家相続仕罷在候

處当子三月廿四月養父道友死去仕候然ル處前書定治儀同五月廿四日私方江罷越今日ゟ相続可致旨理不尽之儀申懸ケ候ニ付亡父江難相済儀ニ御座候へとも養子之事故何事も差扣罷在候ハヽ親類之もの訳付いたし呉候儀与存罷在候處右者腰押いたし候もの有之同八月廿一日私儀を別家ニいたし本家者定治ニ相定候間譲状も焼捨可申杯与申者有之逸ニ難心得第一亡父江対し無申訳甚不審之至与奉存候右様相成候而者養母儀者定治一存□者継母之儀殊更可及難渋儀者勿論私并女房弟妹とも同様難相成散々ニ成親類ども方ニ懸り罷在難儀至極仕第一養母難渋を察シ骨随ニ徹し不得止事御訴訟奉申上候何卒以御慈悲相手之者被召出御吟味之上譲状之通り相続可仕様被仰付被下置候ハヽ難有仕合奉存候以上

布敷村
百姓　定右衛門印

文政十一戊子年十二月

御奉行所様

如斯訴状差出候間返答書認来ル廿八日役所江罷出可対決者也

子十二月十四日　寺　三右印　（朱書）「掛り初判」

寺　退蔵印

布敷村
定治
右
五人組
年寄
庄屋

子十二月十四日

右之通裏書印形相済今四時定右衛門并差添荘屋五郎左衛門宿楠右衛門公事方へ呼出訴状裏書被下候間早速相手之ものへ相渡為致返答書写訴状相添来ル廿七日双方一同罷出可相届旨次郎左衛門申渡訴状并無印之添書相渡左之通

（朱書）「奉書半切壱枚ニ認」

押切訴状裏書被下候間早速相手之ものへ相渡為致返答書写訴状相添来ル廿七日四時双方一同罷出可相届者也

（朱書）「上ワ包美濃紙半枚ニ而端折上ニ書付ト認」

子十二月十四日公事方

右請書被仰付候旨次郎左衛門申渡忠之丞読之印形取之左之通

差上申一札之事

（朱書）「中紙巻紙」　訴状御裏書被下置難有頂戴仕候早速相手之者へ

ニ認」　相渡為返答書写訴状相添来ル廿七日四時双方一同罷出御届可申上旨被仰渡奉畏候為後證一札差上申處如件

布敷村

文政十一戊子年十二月十四日　定右衛門印

御奉行所

子十二月廿七日

一御用宿楠右衛門忠左衛門今四時前役所へ罷出定治義今朝出懸ケ候處俄ニ致服痛不罷出候處庄屋年寄煩ニ付代五人組由兵衛与申者罷出候旨届出候間右由兵衛公事方へ呼出し早々罷帰定治病気差発り難罷出候ハヽ親類之者名代ニ而成とも返答書可差上儀ニ候間其段申達候右早々罷出可相届旨忠之丞申達シ差戻ス

同日八ツ時過

一右定治快相成候趣ニ而五人組ニ而親類之者差添罷出候段御用宿忠左衛門届出候間直ニ役所へ召連可罷出旨申達ス

同日七時

一　布敷村庄屋年寄

煩ニ付代

組頭

一　由兵衛

五人組

助　七

次左衛門

楽

相手　定　治

右宿忠左衛門

右届差添罷出候付公事方へ呼出忠之丞仙蔵立合返書請取之扣者留置本紙ハ返答人へ渡遣シ来ル正月十五日過可罷出旨忠之丞申達ス

一　同村

役人代組頭

由兵衛

訴訟人　定右衛門

右宿楠右衛門

右之ものとも同刻公事方へ呼出し来ル正月十五日過可罷出旨又同人申達差戻ス

同日

一右定治義近来用候印形致紛失候付已前相用候印形相用候旨宿忠左衛門届出候間書付を以申出候様申達則差出左之通

覚

㊞　　布敷村
　　定　治

右者私近来相用候印形紛失仕候付以前相用候印形相用候間此段御届申上候已上

子十二月廿七日

右之通申出候間則差上申候

布敷村
庄屋煩ニ付代
由兵衛

公事方
御役所様

乍恐以返答書奉申上候

布敷村定治奉申上候同村定治方ゟ相懸り候跡式出入今般御訴訟申上今廿八日御差日之　御裏　御尊判頂戴相附恐入奉拝見左ニ御答奉申上候

一去ル巳年私父定右衛門義御田地家財等不残私ともニ相譲り自身ハ落髪いたし道友与改名隠居仕候其時私ともニ申聞候者其方已後定右衛門与改名いたし御上様公事役等丁寧ニ相勤萬事不調法無之様可相心得旨呉々申聞候則親父差図ニ而其趣庄屋所へ相届申候夫より四五年之間五人組頭相勤居申候然ル処私とも不調法之義仕親父ニ被呵候而暫時之間被追出御中間之日傭杯仕居申候其後挨拶人御座候而事済仕候間罷帰候其後兎や角申居候處或夜別所村高福寺与居村宇四郎被参私共へ兼而何之噺合も無之不図被申聞候ハ其方親父聟養子いたし候様被頼候如何ケ思候哉与被尋候故親父望ニ御座候ハヽ御世話可被下候私ハ私ゟ了簡御座候与返事仕候得とも其儀糺も無御座候則戊四月廿八日聟参申候其日ハ私とも池姫之宮へ人形見ニ参り居申候故聟入之儀者存不申候夫ゟ二三ケ月斗り已前親父申候ハ其方ハ上ミ之家へ暫時参り居候得と申候如何之儀哉与存候得とも愚昧之私親之気ニ逆ひ候而ハ不宜与存候故其儘上ミ之家へ参居申候其後親類之者私共へ兼而相談も不致離證文相認其方も印形いたし并ニ諸親類之印形を取可申様申聞候とも私共承知不仕候私如何ニ愚鈍之者ニ候迚余り押付ケ間敷儀残念骨髄ニ徹シ候故其儘京田村善福寺野村路村宝寿寺へ参右之趣立服いたし出仕候處両寺とも被申聞候ニハ何等之儀出来いたし候ともがさつケ間敷事不致不法之儀不申候様急度心得可申与申分聞候其後右之訳親類之者へ御咄被下候趣ニ御座候其後去ル亥春三月頃ニ高分与申書付いたし呉候得とも難とも受不申候其儘ニ相過候處又候居付庄屋私ともを呼寄被申候ニハ何分和融いたし候事宜候間高五石ハ其元五石ハ親父又五石ハ聟

与相定親之気ニ入候者親父分之五石ハ引込候様ニ与被申候へとも是又私とも得心不仕候扨亦当春ニ至り親とも病気ニ付漸々ニ重り候故私とも夫婦之者看病仕居候故親父申候ニハ此度之病気其方心仕セニ看病致呉候様申聞候故昼夜付添介抱仕候其後野村路村宝寿寺呼寄呉候様申候故早速人遣候處同人も左程之大病とハ不存大ニ驚明日罷越可申由ニ而使ハ帰申候扨翌日宝寿寺被参候處親とも大ニ悦私此度之病気者快気無覚束存候間我死後悴事偏ニ御頼申与云而手を合落涙して何角呉々申延（ママ）候得とも私も傍居候得とも共ニ落涙仕候故委細ニハ聞認不申候夫ゟ段々病気差重り三月廿三日死去仕候其後忌中相勤五月廿二日忌明無滞相済候上親類集居候得ハ能序と存候故私申出候扨殿誰ニも乍序御咄申度義御座候間御聞可被下与申候處親類之者何等之儀哉与相尋候私申談度義余之義ニ而者無御座候私とも一旦相続いたし親類中へ披露仕候事相違無御座候如何成思召ニ而私ともへ相談も無之高分等被成候哉与相尋候處世話人宇四郎其方親父頼ニ而聟貰以前ニ高福寺并此方咄いたし其方も承知之上世話致候事也□（与）申候私申ニハ成程其事ハ覚居申候親父之了管ハ達而隠居之積哉与察候故親父望之義ニ候ハヽ御世話可被下与返答仕候其節私ハ私が了管御座候と申候ハ此訳合ニ御座候私とも家名相続仕候義者乍恐　御上様迚隠れ無之事ニ御座候然ルニ私ともへ一應之相談も無之別家杯与

申立候義ハ其不審ニ御座候別家願之儀当人を差置何レゟ願出候哉是又不審之義ニ御座候何等愚鈍之私ともニ候故相続無覚束思召候ハヽ親父并親類中一統相談之上得与御申諭被下候而其上私とも理不尽之義申募り候ハヽ其節ハ如何様ニ被成候而も違背不仕候へとも右様之義ニ而ハ親類之深切少も無之様存候間是迚幾度も被申聞候事皆得心不仕候ヶ様之儀申出候事聟承助へハ甚気之毒ニ存候同人へ此方ゟ対談者少も無御座候世話有而被参候事ニ御座候へハ思召御座候世話人へ御懸合可被成与私とも申候扨是迚之取捌親類一統之義ニ而ハ無御座世話人両三人之上与存候私只今申處異存も無之候ハヽ今日ゟ此家者私支配いたし候与申候處宝寿寺縁者ゆへ其席ニ御座候而定治只今申處一理有之哉与存候各如何被思召候哉与被尋候處親類之者申ニハ放心之親父ニ被誑不都束成事仕申訳無御座候不調法之段真平御免可被下与申候故則其日ゟ萬事私とも支配仕候

一八月初旬ニ居村宇四郎京田村善福寺野路寺村宝寿寺へ参り是迚不行届之段何事も真平御免被下何卒聟承助身分立行候様御世話御願申上候与申候由扨又同月十七日聟承助善福寺へ帳面持参いたし何分早々御越被下訳付被下候様御願申上候而申候由

一八月廿一日ニ下村源右衛門同五郎平聞人御願被成候而善福寺

宝寿寺両寺とも被参株内之者幷親類呼寄一統相談被致承助へ高四石斗分候而如何有之候哉与被及相続候處株内之者申ニハ当村ハ小高之處是迚ニハ四石分ケ隠居いたし候者無御座候村之振合ハ高三石カ立百姓与申□由ニ而御座候様申候故高三石五斗と相定メ其趣聞人源右衛門居村宇四郎両人承助へ御咄被下候處早速承知仕候与申候由源右衛門被申候ニハ実兄大俣村金次郎へも得与御相談之上御返事可宜与余り早速之返答成与被申候へハ承助申ニハ此儀者私一身之事兄へ相談ニ不及与申候由則俱々本宅へ参り御世話忝承知仕候与返答仕何れも江一札申候右様之義ニ御座候故余念者無之義与存罷在候

一御訴訟ニ譲状ハ焼捨可申杯与申者有之右者八月廿一日分け付相決候時承助早速承知仕相済候故善福寺申候ニハ譲状道友被致候由承り候故先達而宝寿寺庄屋へ相尋候處役印ハ不致候由ニ庄屋被申候由田畑譲状ニ役印もなく殊ニ老耄放心之親父杯与親類之者申候由承り候者此譲状慥成物とも不被存候最早無用之ものニ候へハ残し置候而ハ後日ニ面倒成事も有之ものニ御座候者焼捨か又ハ反古ニいたし候而可宜哉如何と被申候へハ株内之者皆々ハ其者成程聟承知いたし候事相済候上ハ無用之ものニ御座候与申候

一腰押者有之腰押者与御座候者定て善福寺宝寿寺両寺之事ニ可有之与存候右善福寺ハ私とも幼年之時手習ニ参三四年寝泊りいたし居候故其後も常々参り何角御世話ニ相成候又宝寿寺ハ縁者ニ御座候故前々参り候而何事も相談仕候右様之訳故此度之義ハ別而御世話相頼候

一継母可及難渋ニ義ハ勿論私とも女房弟妹右弟之儀者親とも存生之内ゟ仙台屋与平方へ参り居申候承助女房ハ六月以来何方へ歟参り候其居所ハ存不申候母与妹ハ私とも養育いたし大切ニ仕居候然レとも承助未タ彼是与申居候へハ定而心配可被致与気之毒ニ奉存候へとも格別之難渋成事無之様養育仕度存罷在候右愚昧之私とも管々敷申述書付奉差上候事恐多奉存候具ニ相分不申儀ハ乍恐両寺へ御尋被為掛何卒以御憐愍右願之通被為仰付被下置候ハヽ難有仕合可奉存候以上

布敷村

定　治印

文政十一戊子年十二月

御奉行所様

文政十二己丑年正月十七日

一右定右衛門幷定治村役人五人組之者来ル廿日罷出候様尤十九日罷出可相届旨申通候様御用宿両人へ申達ス

丑正月廿日

一立會退蔵三右衛門出席次郎左衛門小頭両人掛り忠之丞同心出
人高嶋甚助塩野此介

布敷村年寄　宇四郎
同村百姓
訴訟人　定右衛門
右宿竹屋町忠左衛門
同村庄屋　五郎左衛門

五人組莚之上へ出ル　五人組　助七
同村
相手方　定治
右宿新町楠右衛門

右之者とも今九時過ゟ召出訴状返答書可上旨忠之丞申聞候上
御用宿忠左衛門取次差出忠之丞受取読上之畢而
（朱書）「訴状返答書読口上」

定治へ

去ル巳年田地家財等其方へ譲候へ
とも一旦追出され跡目ハ定右衛門
相続いたし罷在候處道友死去後忌

明之上今日ゟ此家ハ其方支配いた
すと申押而本家へ戻候趣ニ相見へ
ルガ道友病中ニ其方へ相続可致様
申渡候證拠がある歟

定右衛門へ

亡父道友ゟ諸色譲請候よし申立ル
ガ證拠かある歟
（朱書）「答」

譲状出ス読之」

又　定治へ

実子とハ申なから道友心躰ニ不叶
養子いたし家督譲候趣ニ相見へ定
右衛門方ニハ右之通證拠之書もの
有之上ハ其方申分立かたひ
（朱書）「立而」

右尋書を以承糺候處相手定治上ニ者證拠可成書付等も一切無
之申口迫之儀者難取申定右衛門上ニ者譲状并田畑ケ所付帳等
證拠ニ可成書物有之差出候間忠之丞受取読之候上去ル亥年三
月養父道友へ親類者ゟ相頼候付定治へ高分ケ之書付道友認親
類之者相渡候へとも不請取跡ニ而親類ゟ私へ相渡候付致所持
候旨定右衛門申之ニ付為差出是又忠之丞受取読上之候上尚又

定治相糺候處父道友病中ニ縁者ニ付野村路村宝寿寺呼寄呉候様申ニ付則呼ニ遣候處翌日罷越候付道友〻何分悴義相頼段手を合而申聞候義を私義も側ニ罷在承り候へとも聢ニ不相覚委細之義ハ右宝寿寺言込罷在候杯与彼是申之候へとも治定いたし候申口も無之ニ付尋書ニ有之通申分難立旨為申聞下ケ置譲状左之通

譲状之事

一拙者事雖有実男子名跡可譲無者親類中相談之上大俣村金次郎殿弟承助を貰請候右之者致永住候上者家名并家徳(ママ)家財右一鋪相譲申處実正也右ニ付到後ニ若シ外〻違乱妨申者不可有之候為後日譲證仍而如件

文政十亥ノ三月日　　養父　道友　印

親類惣代

引土新町

仙台屋与兵衛印

養子

定右衛門江

同　惣右衛門印

居村

同　宇四郎印

外ニ田地小畑何所別紙ニ相認相譲申候如件

一持高歩畝并何所覚帳　壱冊

但写有内訳略之田畑〻高左之通

上田〻四反八畝廿六歩

分米六石八斗四升壱合三勺

中田〻弐反六畝廿五歩

分米三石四斗八升八合三勺

下田〻壱反四畝弐拾弐歩

分米壱石四斗七升三合三勺

畝数合九反拾三歩

分米拾壱石八斗合九勺

上畑〻六畝七歩

分米四斗九升八合七勺

中畑〻九畝也

分米五斗四升

下畑〻弐反拾五歩

分米四斗壱升

畝数合三反五畝弐拾弐歩

分米壱石四斗四升八合七勺

田畑畝数合壱町弐反六畝五歩

分米合拾三石弐斗五升壱合六勺

外ニ

所ハの上

一　下田六畝　　元禄六

此地文政九戌ノ春ゟ十ヶ年季ニ而代銀五百匁領り置申候
来ル未年迄ニ元銀相立候ハヽ右田地戻り候様之證文相渡
シ夫迄ニ工面可被成右者久右衛門ニ有

右之通り相改此度譲状ニ相添へ譲り申所実正也然ル上ハ此度
其元随分大切ニ御用可被下候右御頼申候若外々ゟ如何様之儀
申者有之候共少も少も相違無御座候為後日之譲證仍而如件

文政十亥ノ三月日　　養父
道友印

養子
定右衛門江

一前書ニ有之通り定治不請差戻候高書分ヶ書付左之通

書分ヶ之事

一家　一軒

一上畑壱畝拾五歩　　屋敷也
分米壱斗弐升

一中田弐畝五歩　所ハ中嶋柳町元別所村
分米弐斗八升壱合六勺　　泉

四畝廿歩之内

一上田弐畝拾歩　　元別所村
分米三斗弐升六合七勺　　五郎左衛門

八畝廿六歩之内

一上田四畝拾三歩　所ハ中嶋すがばな
分米六斗弐升七勺

一上田六畝四歩　所ハ宮上元下村与左衛門
分米八斗五升八合七勺

一下田弐畝廿八歩　同所　　元六郎三郎
分米弐斗九升三合四勺

一上畑壱畝五歩　所ハのろなか
分米九升三合四勺　　元楽

惣高合弐石五斗九升四合四勺

一山畑　壱ヶ所　所ハ中嶋木村の上

一山　壱ヶ所　同あんの谷

文政十亥ノ三月日　　道友印

定治当

右者親類中頼ニ仍而書分ヶ印置者也
但右書分ヶ書付本紙ハ戻シ遣ス

一前書田畑ヶ所付帳之内ニ質地證文布敷村久右衛門与申者へ道

友定右衛門与申候中相渡有之趣ニ付年寄宇四郎借り請為差出
候様宿楠右衛門へ内々申達則差出ス左之通

質地證文

一 ――――――――

文段略ス

田地主　定右衛門印

文政九酉戌年三月

雇人　清八印

久右衛門殿

奥書略之

庄屋　五郎左衛門印

年寄　宇四郎印

右定右衛門印形譲状ニ引合候處手跡印形無相違依之右質地
證文ハ直ニ下ケ遣ス

同月

庄屋　五郎左衛門

年寄　宇四郎

五人組　助七

相手　定治

右宿竹屋町忠左衛門

右之者とも同刻公事方へ呼出次郎左衛門掛り忠之丞立合承糺
左之通

但銘々共両人御代官詰所へ罷出致内聞候

定治へ

其方父道友病中致介抱罷在候処縁者ニ付野
村路村宝寿寺呼寄呉候様申候付呼ニ遣候罷
越候上道友落涙いたし何分悴儀相頼段申聞
候義側ニ罷在承り候へとも倶ニ落涙いたし
聢ニ不相覚宝寿寺御召出御糺相願候段理申
与證拠ニ可成書物等道友ゟ渡置候儀ニも無
之上ハ申口迚之儀者難取申又承助養子ニ致
候義ハ親類ゟ鳥渡承り候而已聢々之咄も無
之既ニ養子引越参り候日も池姫之宮へ参り
居候位之儀故失張私相続ニ而阿るじニ無相
違旨是又證拠ニ申之候へとも右様之儀者都
而其方家督相続与之申分ニハ難立儀ニ而全

躰家督相続致罷在候義ニ候ハヽ養子可致謂
れも無之譲状ニも実男子雖有家督可結もの
ニ無之段相認有之其方ハ無きものと見て道
友取斗候事ニ相見へ殊ニ宗門帳面ニも当定
右衛門一家内相認其方ハ別而同寺ゟして又
一家内相認有之上ハ凡而之申分難相立旨品
々理解申聞候処證拠ニ可成書物等も無之上
ハ恐入候旨申候ニ付尚押而相尋候処同様恐
入候由申候ニ付下ヶ置
一乍年寄役親類ニ付宇四郎道友ニ被相頼
養子等之致世話候始末心覚ニ記し置候
書付宿楠右衛門へ為見候趣ニ而差出候
間忠之丞預り置候由差出候間致一覧候
上楠右衛門へ同人ゟ為差戻候

同日

一立會出席前記之通

布敷村
庄屋
五郎左衛門
年寄

宇四郎
五人組
助　七
同村
定右衛門
（朱書）「丑ニ三十八」
同
定　治
（朱書）「丑ニ三十二」

（朱書）「家内五人」
（朱書）「同四人」

右之者共今　七時過罷出掛り三右衛門左之通申渡ス

申渡

布敷村
百姓
訴訟方　定右衛門

一跡式出入

同村
相手方　定　治

其方共出入遂吟味處申口迄之儀者双方共雖取用譲状吟
味之上実子雖有之名跡可譲ものニあらず仍而親類相談
之上金次郎弟承助を養子ニ貰家名家督家財一式相譲ル
旨親道友自筆ニ而親類加判之書付承助事定右衛門譲請

致所持罷在書面怪敷儀も無之上ハ譲状之通道友跡式ハ
定右衛門与相心得双方令和順再論ニ及間敷候
右申渡趣證文申付ル
正月
右畢而同様公事方へ呼出請證文仰付候旨次郎左衛門申渡忠
之丞為読聞印形取之左之通
差上申一札之事
一私共出入被為遂御吟味候處双方申口詰之義ハ難御取用譲状御
吟味之上実子雖有之名跡可譲ものニあらす仍而親類相談之上
金次郎弟承助を養子ニ貰家名家督家財一式相譲候旨親道友自
筆ニ而親類加判之書付承助事定右衛門譲渡致所持罷在書面怪
敷義も無之上ハ譲状之通道友跡式者定右衛門与相心得双方令
和順再論ニ及間敷旨被仰渡一同承知奉畏候若相背候ハヽ重科
可被仰付候仍御請證文差上申處如件
布敷村
百姓
文政十二己丑年正月廿日　訴訟方　定右衛門印
同村
相手方　定治印
御奉行所
前書被仰渡候趣私共一同罷在奉承知候依之奥書を以申上候以
上
布敷村
庄屋
五郎左衛門印
年寄
宇四郎印
五人組
助七　爪印
（印形持参不致ニ付
右畢而
一　定右衛門へ
其方養父道友6之譲状ハ役所ニ
被留置候
一田畑ヶ所付帳本紙ニ下ヶ被遣候
間写可被取出候
右之通次郎左衛門申達候上相渡
一札取之左之通
差上申一札之事
一持高歩畝并何所覚書　壱冊
一書付　壱通

但書分ケ之事与有之

右之通御吟味ニ付差上候処御下ケ被成下慥ニ奉受取候為後證仍如件

布敷村　定右衛門印

文政十二己丑年正月廿日

御奉行所

一　定治用印紛失ニ付申出候書付　壱通
一　道友譲状本紙　壱通
一　田畑何所付帳写　壱冊
一　申渡請書　壱通
一　吟味ニ付定右衛門差出候書付類下ケ遣候請取候旨　壱通

以上

右之通一件封置

文政十二己丑年正月

寺田退蔵
寺井三右衛門

（村上一博）

一　右申渡書　壱通

右御掛り織□（崎）殿江掛三右衛門差上相済候段申上ル

但無伺裁許御申付候節ハ如此定

一　右同断　壱通

右御代官植木半五へ相渡ス

一　前書請證之写　壱通

右御用宿新町茶屋楠右衛門へ掛り忠之丞方へ申渡ス但猥ニ外々へ為見候義ハ不相成段も申達し置

丑二月八日

一　前記定治儀無滞別家引移相済旨村役人掛り忠之丞方へ届出候旨申出候

一　訴状返答書扣とも　四通
一　無印之認書扣とも　弐通
一　右　請書　壱通

A6（表紙）

文政十一戊子年十二月廿三日

京都相国寺門前九軒町山城屋喜兵衛

相手　和江村太右衛門田地不差戻出入

丑二月九日済　寺井三右衛門

文政十一戊子年十二月廿三日出訴

（朱書）「寺井掛」

（朱書）「六」京都相国寺門前九軒町山城屋喜兵衛相手和江村太右衛門田地不差戻出入

丑二月九日済

（朱書）「右同人　相手由良村源左衛門右同断之出入」

但喜兵衛幷付添人嘉四郎御用宿新町楠右衛門方止宿届

右訴状弐通添状とも月行司堀上町年寄宗助小頭共江差出候付請取候銘々共へ差出候間添状致開封候處和江村太右衛門与申もの相懸り候儀者申来候得共由良村源左衛門相手取候儀者添状之表ニ無之候間右源左衛門江相懸り候訴状者差戻シ太右衛門江者返答書申付早々可及吟味及月迫ニ候付吟味差延候間其旨相心得帰国致候共勝手ニいたし候様可申聞旨月行司宗助江可申達旨掛三右衛門ゟ小頭守衛門へ申達ス

右之趣被致承知候様小谷次郎左衛門掛同人ゟ申達ス

牧野内匠頭殿御内　神尾備中守組与力

寺田退蔵様　石嶋五三郎

寺井三右衛門様　松平伊勢守組与力

飯室助左衛門

（朱書）「白木状箱入封目印」

以切紙致啓上候然者当表相国寺門前九軒町山城屋喜兵衛儀御領分丹後国伽佐郡和江村百姓太右衛門相手取田地不差戻儀ニ付其表江願出度旨添状之儀相願候間此段拙者共より得御意候様被申候付如此御座候以上

松平伊勢守組与力

十二月九日　病気ニ付無印形

本多祐次郎

右同断

入江吉兵衛

〃　不破伊左衛門印

〃　真野八郎兵衛印

出役ニ付無印形

飯室助左衛門

神尾備中守組与力
平塚表十郎印
出役ニ付無印形
神沢粂之助
上田弥右衛門印
加納萬五郎印
石嶋五三郎印

寺田退蔵様
寺井三右衛門様

一右添状左之訴状とも掛り三右衛門御用番織崎殿江持参訴状読申候添状訴状とも直ニ持帰ル訴状左之通

乍恐以書付奉願上候

一私亡父新屋与申もの丹後国加佐郡石浦村ニ年久敷住居仕私儀者前名文四郎与申先年当時之町分先山城屋喜兵衛方へ養子ニ罷越養父喜兵衛儀相果候付私儀跡相続仕罷在候然處私祖父新屋開発仕候同村領御田地元文三午年十月御改之上新下田四畝九歩半右午年ゟ収納可仕旨別紙之通御書付頂戴仕則御田地右之由緒を以新屋新田与申字相唱其後私亡父迄譲傳無子細所持罷在候處私亡父新屋存生中無據銀子入用之儀有之右田地引当ニ差入御領分同郡和江村太右衛門方ニ而銀壱貫五百目借受利

足之儀者右田地作徳米相渡候契約ニ而年々相対通作徳米相渡来候處父新屋儀十九年已前相果跡式之儀者私弟清五郎義跡相続仕右御田地者私江譲請候付其後も年々為利足作徳米相渡来候處右借用銀調達仕候ニ付返済可仕候間引当之田地差戻呉候様相手太右衛門江是迄度々懸合候へども何角与勝手儘而已申之差戻不申甚以難儀迷惑仕候付不得止事此度京都御役所様江奉願御添翰頂戴仕持参差上此段奉願上候何卒御慈悲を以相手太右衛門義御召出被成下借用銀者何時ニ而も返済可仕候間引当之田地早々差戻呉候様仰付被下候ハヽ難在可奉存候依之譲請罷在候御田地書付之写奉入御覧候以上

京都相国寺門前
九軒町
庄年寄（ママ）
山城屋
喜兵衛印

文政戊子年十二月　訴訟人
五人組
付添人
嘉四郎印

田辺
御役所様

書付写差出ス左之通

覚

一新下田四畝九歩半

分米三斗八升八合五勺　九斗代

取米壱斗九升五合　免四ッ

口米九合八勺

米〆弐斗四合八勺　上納

右者□方新田去秋歩畝相改候当

□□年貢可為収納者也

元文三年戌午年十月

小善右印

福市郎兵印

石浦村

庄屋

新屋

（朱書）「子十二月廿三日織崎殿江上ル」

公事出入頭書

子十一月廿三日出

一京都相国寺門前九軒町山城屋喜兵衛相手和江村太右

衛門田地不差戻出入

右之公事出入書面之通御座候

子十二月

子十二月廿四日

一右昨日差出候由良村源左衛門江相懸り候儀者去ル文化十二亥

年奉願候内之義ニ付御添状之義者不存候へとも御取上御吟味

相願度趣ニ申之口上書差出候間取次差上候旨月行司右同人小

頭共へ差出候付請取之銘々共へ差出候得とも先年願之内抔与

申候義も不相分候付難取立候間其段月行司へ申達口上書差戻

候様掛同人小頭共へ申達写書相渡ス

和江村

太右衛門

右之もの明廿五日四時召連可罷出者也

十二月廿四日公事方印

年寄

荘□（屋）

但書共ニ同致出訴罷在候時節ニ付村宿新町丹波屋七

左衛門方江御肩書いたし差出ス

子十二月廿五日

和江村庄屋

又左衛門
同村
太右衛門
右宿竹屋町　忠左衛門

右之者ども今四ッ時公事方へ呼出次郎左衛門掛り忠之丞仙蔵立合

此度京都相国寺門前九軒町山城屋喜兵衛与申もの其方へ相懸り訴状差出候間御返答書早々可差出依之喜兵衛訴状相渡遣ス旨次郎左衛門申渡差戻ス

但右返答書来正月上旬之内ニ為差出候様宿忠左衛門江申達シ置

子十二月廿六日

一右訴訟人喜兵衛義付添人嘉四郎両人とも来正月中旬迄石浦村親類之者方へ罷越度旨願口上ニ而御用宿楠右衛門忠之丞方へ申出候間承置候旨同人申出候

文政十二己丑年
正月十六日

和江村年寄
吉左衛門
同村

太右衛門
右宿竹屋町　忠左衛門

右宿差添返答人名前書付を以届出候間今四時公事方呼出次郎左衛門義問方始仙蔵義ハ不快引込ニ付欠席忠之丞請取之返答書幷證文写之趣を以一應承糺下ケ置致逗留罷在候様可申聞旨御用宿忠左衛門江申達差戻返答書左之通

乍恐以返答書奉申上候

和江村太右衛門奉申上候京都相国寺門前九軒町山城屋喜兵衛ゟ私を相手取銀子借用之引当ニ差入置候新田差戻段御訴訟申立候付返答書被仰付驚入左ニ御答奉申上候

一私所持仕罷在候新田之儀安永三午年石浦村新屋ゟ当御城下本町壺屋宗左衛門方江永代ニ賣渡後々少茂申分無之趣相認石浦村新左衛門庄屋久兵衛請人加判之證文宗左衛門方江取置候由ニ御座候處其後洪水ニ而右新田土砂押入或ハ欠田シ荒地之如くニ相成作付難成仍而徳米ハ勿論御年貢茂不相立候得とも道駄隔り候場所手入も行届兼所詮持傳候儀も難成ニ付譲渡可申存右新屋方へ及掛合候由之處同人ハ船商ひいたし候付右新田ニ付意存無之間何レへ賣渡候共勝手次第可致様尚又申聞候由ニ而其砌私亡父太右衛門義農業専ニいたし候を見込隣村之儀右新田可相譲間追々手入いたし起返し可致旨前書宗左衛門悴六左衛門ゟ達而申聞候付任其意則　御城下竹屋町油

屋吉兵衛を請人ニ取寛政八辰年右新田亡父太右衛門江譲請其後年数相懸り前書土砂片付或ハ土手繕ひ又ハ置土等を入拾七ケ年之間丹誠を以漸ク相應之御田地ニ起返し所持仕罷在候得とも何分右普請人足千五百人餘も相掛候其外入用夥敷近年者甚不手廻りニ相成借財相増難儀仕候付一昨年頼母子発起相企右新田銀四貫目之質物ニ連中へ差入れ罷在候儀ニ御座候然ル處去子六月中前書喜兵衛参り右新田之書付有之候ハヽ少之内借用致度旨申聞候へ共右書付ハ質地ニ差添遣候間無之趣申答置候處今般私を相手取新屋方より引当ニ差入置候新田不差戻抔無跡形義を差掛御訴訟申上候段何共難心得奉存候前文之通私亡父太右衛門儀六左衛門方ゟ譲請所持仕候段相違無御座候間右躰喜兵衛ゟ私へ想懸り御訴訟申上候筋与ハ不奉存候間何卒以御慈悲右様難渋不申懸ケ候様被仰付被下置候ハヽ難有仕合可奉存候以上

文政十二己丑正月　　和江村　太右衛門印

御奉行所様

右太右衛門證文写添差出左之通

仕申證文之事

一下田四畝九歩半　所ハすくも山新田

分米三斗八升八合五勺　中切三枚

取米弐斗四合八勺

預ケ口弐石

右引残而壱石七斗九升五合弐勺　作徳

代銀札壱貫五百目

右之田地永代ニ賣渡シ代銀札慥請取申處実正也然ル上者右田地ニ付後之年ニ至而少茂申分無御座候為後日證文仍而如件

田地主石浦村　新屋判

安永三甲午年十二月　請人同村　新左衛門判

庄屋同村　久兵衛判

壷屋宗左門様

前書之通田地代銀札五百目ニ永代売渡申所実正也為後日如件

寛政八丙辰年十一月　壷屋　六左衛門

口入油屋　吉兵衛

和江村　太右衛門殿

和江村
太右衛門申口
丑ニ五拾六歳

一持高壱石余
一家内五人相暮罷在候
一安永三午年證文ニ有之新屋ハ喜兵衛清五郎実父ニ御座候處右新屋ハ相果候
一證文ニ有之候請人ハ右新屋ハ別家ニ御座候右新左衛門ハ相果当時悴新左衛門年寄致相勤罷在候
一右證文ニ有之庄屋久兵衛ハ相果当時悴久兵衛与申候由
一新屋舟商ハ三拾年斗已前相止候歟と覚申候
一私父太右衛門義ハ文化十四年丑年相果申候
一洪水ニ而荒地同様与申儀共親とも申聞則六左衛門ゟ買請候節者欠崩レ候外ハ子供之遊所ニ御座候處を何ッゟ与申義ハ不相知候得とも拾七ヶ年目ニ作付仕候義ニ御座候間此段申上候義ニ御座候
一右田地一昨年頼母子相止(企カ)其節證文之請人ハ組頭市郎左衛門ニ御座候
一右頼母子連中ハ竹屋町油屋吉兵衛金物屋長左衛門永間村喜左衛門此外者村内ニ而相頼候義ニ御座候

一田普請遣人足へ賃銀渡請取等ハ取置不申義ニ御座候
一證文之請人竹屋町油屋吉兵衛与申ハ当吉兵衛父久兵衛ニ御座候
一私儀若年之頃ハ喜兵衛朋友ニ御座候間入魂ニハ御座候へとも此度願付候儀者先年より同人彼是申由ニ而則田地之書付之儀も申聞候へとも何分取拵無之儀を申聞候處何事も携り不申に今罷在候義ニ御座候
一證文ニ中切三枚与有之義者地続南ノ方ゟ申事ニ而則南之方ゟ中之切三枚与申義ニ御座候

丑正月十九日

本町壷屋
六左衛門

右之者忠之丞方へ呼出前書和江村太右衛門返答書之趣ニ付安永年中祖父宗左衛門石浦村新屋ゟ新田買取罷在候處親六左衛門代寛政八辰年右太右衛門父太右衛門へ売渡候次第書留有之候ハヽ致吟味可申出旨為申達置候處安永三午年買取候節之證文ニ継足書添右太右衛門へ渡有之趣ハ承り罷在候得とも書留等も無之其節之次第難相知旨申出候由忠之丞申出候

丑正月廿七日　相国寺門前九軒町

山城屋
喜兵衛
付添
嘉四郎

右之ものども今晩私方へ罷帰候旨暮時過御用宿楠右衛門届出候由

丑正月廿八日

右喜兵衛罷帰候付左之趣惣年寄逸見与一左衛門ゟ可申聞旨申達書付可相渡旨掛り三右衛門小頭共へ申達書付相渡ス

但翌廿九日惣年寄方へ呼出右之趣申聞候由宿楠右衛門申出候

京都相国寺門前
九軒町
山城屋
喜兵衛

（朱書）「奉書半切ニ認
美濃紙半枚ニ
包端折上ニ覚
書ト認」

此度当領分加佐郡和江村太右衛門へ相掛ル願之一件遂吟味候處右新田之儀安永三午年石浦村新屋より当所本町壺屋六左衛門祖父宗左衛門方へ銀札壱貫五百目ニ永代賣渡則後年ニ至少茂申分無之趣相認石浦村百姓新左衛門庄屋久兵衛證人加判之證文宗左衛門方へ取置候由之處右宗左衛門悴六左衛門代ニ至当所竹屋町油屋吉兵衛口入ニ而寛政八辰年右新田当太右衛門亡父太右衛門方へ銀札五百目ニ譲請御所持罷在候儀ニ而新屋方ゟ貸銀引当ニ取置不差戻抔与申儀者跡形も無之儀之旨相手太右衛門申之候付尚相糺候處当六左衛門申口も致符合則證文吟味之上右之ものども申立候通永代賣無紛相見候間此段可申聞候

丑正月

右書付之趣申聞候上若御書下亡父ゟ被相譲致所持罷在候抔与申立候ハヽ左之趣心得罷在可及挨拶旨与得為申聞置候様尚又小頭守衛門へ申達書付相渡併左之書付ハ喜兵衛へ為見候儀ニ者無之間其段も申達置

右新田御改之節年貢何ノ年ゟ可納与申儀を御認被遣候儀ニ而村役人取立無相違相納候上ハ右地所当　御領分之内者孰レニ致所持候とも一旦永代賣ニいたし候上右書付所持いたし候とも彼是可申立筋ニ不被存候

丑正月

前書達書付惣年寄御用宿楠右衛門江相渡候付写取差戻尤喜兵衛ゟ御書下所持之趣も不申立罷帰候旨楠右衛門届出候

丑二月二日

一前書之趣惣年寄ゟ申聞候處承り罷帰尚又昨朔月追願書惣年寄へ差出候趣申出小頭共へ差出候間受取之今日銘々共へ差出候間致一覧候上其段被致承知候様次郎左衛門へ申達願書相渡左之通

乍恐以書付奉申上候

訴訟人京都相国寺門前九軒町山城屋喜兵衛付添嘉四郎一同奉申上候

一和江村太右衛門ゟ貸銀引当抔与申義ハ跡形も無御座候旨申立候儀去ル文化十二亥年十二月私共太右衛門へ及対談候處同人申聞候者壷屋六左衛門方江石浦村新屋ゟ差入置候證文私へ譲受候間此一件ニ付如何様之儀差起り候とも私引請及應対候様申壷屋六左衛門ニ少シ茂懸リハ無御座候与申候故太右衛門を相手取御訴訟奉申上候義ニ御座候亡父新屋壷屋六左衛門へ如何様之證文認遣候儀者存不申候へとも亡父私ニ申聞候者其方何卒出性いたし右御田地取戻し呉候様申之則戻り證文ハ不取置候へとも御奉行所様ゟ之御書下所持いたし候故其方へ相譲候何時ニ而も元銀調達次第差戻呉候約条ニ而右　御書下ケハ

残し置候与申聞候御訴訟ニも奉申上候通り亡父呉々も遺言仕候得者此儘ニ相成候而者私とも先祖へ申訳難立候間何卒以御憐愍右願之通早速ニ差戻呉候様被為仰付被下置候ハヽ難有奉存候以上

京都相国寺門前九軒町
山城屋　喜兵衛印
付添　嘉四郎印

文故十二己丑年二月朔日

田辺
御役所様

右追願書御席へ入御覧今一應相手方之ものゟ口上書為差出喜兵衛へ為申聞候方ニ取斗可申段申上置

同日

和江村
太右衛門

右之もの明三日五時過
召連可罷出者也
二月二日公事方印
庄屋

又左衛門
右宿
竹屋町
忠左衛門

同日

一　本町
上野六左衛門

右之もの忠之丞方へ呼出京都山城屋喜兵衛追願書差戻様引合候儀有之ニ付承糺候趣左之通

先月御尋之筋申上候通ニ而尤銀子持参候ハヽ何時ニ而も差戻抔与申義ハ決而無之其證拠ニ者戻り證文も不取遣太右衛門へ永代ニ賣渡候上ハ一向申分ハ無之義之心得罷在候由申之趣申出候

丑二月三日

和江村
年寄　吉左衛門
同村　太右衛門

右宿鳥屋
利左衛門

右之者共今五時過ゟ公事方へ呼出次郎左衛門掛り忠之丞仙蔵立合相糺候左之通

太右衛門申口

一文化十二亥年十二月喜兵衛私宅へ参り相咄候者石浦村与右衛門新田譲罷在候趣承り罷在候処相咄候へとも新田之儀ニ付如何様之儀有之候とも私引請應対可致抔与申聞候義ハ毛頭無之儀ニ御座候

一右参候節私つほやゟ譲請所持仕罷在候新田も折を以戻呉候様申聞候へとも私ハ返事も不仕候と覚申候

一右ニ付私申候ハ右新田之義ハ普請物入等多相懸り勿論つほやゟ譲請候事故喜兵衛へかゝり少しも無之段申聞候處又々折も可有之抔と申聞罷帰候義ニ御座候

一去子六月私方へ参り申聞候ハ此度下り候者新田之義ニ付罷越候間親新屋ゟつほや江遣置候證文為見呉候様六左衛門方へ申参り候處其證文ハ私方へ田地ニ付遣置候間見申度候ハヽ私方へ可参旨申聞候間ニ而其段私へ申聞候へとも質地ニ付ケ遣私手ニ無之趣答候処左候ハヽ四五日之中取寄為見呉候様申聞置罷帰其後も途中ニ而出逢候事も有之候へとも何とも不申聞其儘ニ御座候而為見不申義ニ御座候

但此段去子冬つほや六左衛門へ私参り相咄候処決而参り候義ハ無之喜兵衛与申ものハ何様之ものニ候哉も不存由六左衛門申聞候位之義ニ而偽り而已申聞候義ニ御座候

一前ニ申上候去子十二月十三日呼人を以私留守中新田急ニ戻呉候様申越候趣帰宅之上家内之もの申聞候へとも何様之義有之候共喜兵衛へ可戻抔与申謂れ無之段申居候處其後御訴訟申上候由承り奉恐入候儀ニ御座候

右之趣申候付壷屋六左衛門ゟ譲請候節銀子喜兵衛持参候ハヽ戻可遣抔与之申送りハ無之候哉相尋候處決而左様之儀承り不申候由申之ニ付御用宿ニ罷在候様申達差戻ス

丑二月四日

一　御用宿竹屋町　忠左衛門

右之もの掛り忠之丞方へ呼出和江村太右衛門昨日呼出之節申口之趣口上書ニ相認差出候様可申聞旨申達追願書為相渡置

一　本町つほ屋　六左衛門

右之者同様呼出し先達而ゟ為相尋候申口之趣口上書ニ相認差出候様是又為申達置

丑二月五日

右太右衛門六左衛門口上書左之通

乍恐以口上書奉申上候

京都相国寺門前九軒町山城屋喜兵衛追願書奉差上候付左ニ御答奉申上候

一文化十二亥年十二月中私方へ喜兵衛罷越壷屋与一左衛門方ゟ石浦村与右衛門へ譲請候田地之咄仕候上私支配いたし候田地之義も時節を以戻シ呉候様ニとの咄ニ付右者普請入用之夥敷相懸り中々可差戻抔与申義ニ而者無御座勿論壷屋六左衛門ゟ永代譲請之儀ニ付貴様江対シ聊引合ハ無之旨申述候義ニ而此一件ニ付何様之義差起り候とも私引請可戻應対之六左衛門ニ少も懸り候義無御座抔之旨申述候義も聊無之御座候且何時ニ而も元銀調達次第差戻候約条之由も是又及承不申先達而申上候通り石浦村新屋ゟ六左衛門方へ永代ニ売渡六左衛門ゟ亡父太右衛門是亦永代ニ譲渡候義故右様之義毛頭可有之道理ニ無御座候事故此度被相手取候段も存し不寄儀ニ御座候間此段御答奉申上候以上

和江村　太右衛門印

文政十二己丑年二月五日

御奉行所様

乍恐以口上書奉申上候

一京都山城屋喜兵衛与申者和江村太右衛門相手取御訴訟申上候田地之儀者祖父宗左衛門代安永年中石浦村新屋ゟ永代ニ買取置候處亡父六左衛門代へ至り前書太右衛門へ又々永代ニ賣渡右證文之末ニ書認證文相渡元ゟ永代賣田地之義ニ御座候間元銀調達候ハヽ可差戻ス約条抔与申義も聊無御座候義ニ付右太右衛門へ讓渡候儀ニ御座候間再應御尋ニ御座候へとも右之外亡父ゟ承り候義も無御座候間此段御答奉申上候以上

壺屋

文政十二己丑年二月五日　　六左衛門印

御奉行所様

同日

一右太右衛門六左衛門口上書之趣惣年寄方へ前記喜兵衛呼寄可申聞旨相達候様掛三右衛門ゟ小頭守衛門へ申達口上書貳通相渡ス

丑二月七日

一右之趣惣年寄ゟ喜兵衛へ為申聞候上口上書貳通御用宿楠右衛門へ相渡罷帰候處昨六日尚又喜兵衛答書差出候趣申出小頭共へ差出候間請取之銘々共へ差出候間致一覧其段被致承知候様次郎左衛門へ申達答書左之通

乍恐以書付御答奉申上候

一今般壺屋六左衛門ゟ奉申上候新田之儀者新屋ゟ永代ニ買取申候證文故相手太右衛門へ永代賣渡申候杯与申上候儀者入恐奉存候證文ハ如何様ニ御座候共右六左衛門江相對之儀者元銀差戻候ハヽ何時ニ而も差戻呉候約条ニ而互ニ得心之上　御地頭様ゟ之御書付新屋方残置候義ニ御座候然ル處新屋存生中右書付を私共へ讓呉所持罷在候儀相違無御座候間前書引合通り元銀を以御田地差戻呉候様被仰付候ハヽ難有可奉存候以上

一和江村太右衛門ゟ御答奉申上候義ハ大ニ齟齬仕候私共去ル文政十一戊子年十二月和江村へ罷越候節之引合通先達而奉申上候此義者御呼出之節對決被仰付被下置候ハヽ難有可奉存候以上

京都相国寺門前九軒町

山城屋

文政十二己丑年二月六日　　訴訟人　喜兵衛印

付添

嘉四郎印

田辺

御役所様

右喜兵衛答書御席へ入御覧前書之趣再應為申達候へとも申口迚

之儀ニ而得心難仕趣相見候間喜兵衛呼出安永年中銀子調達候ハヽ可差戻抔与申約条之儀有之趣再應申立候へとも賣買致候者共ハ死失之儀ニ付申立候段ハ無證拠之筋ニ而已前新田改之節相渡候書下致所持候とも永代賣ニ致候上ハ申分難取用其上對決之儀申立候へとも當所ニ而ハ他領之もの對決難成義ニ付与力衆江之返書相渡ス間其旨相心得其御支配所之可任差圖旨可申達哉之旨掛リ三右衛門相伺候處伺之通被仰聞候付取調之上呼出可申渡筈

丑二月八日

一右ニ付京都与力衆之返書幷喜兵衛願書新田書下相手方返答書口上書美濃紙横帳ニ認今日御席江掛リ三右衛門入御覧相済候

一　右　喜兵衛
　　嘉四郎

右之者とも明九日役所へ呼出候間外曲輪御門出入之義御席へ掛リ同人申上置

京都相国寺門前
九軒町
山城屋
喜兵衛
付添
嘉四郎

惣年寄
月行司

右之者共明九日五時御用

二月八日

右之通相達候様掛三右衛門小頭共へ申達書付相渡

丑二月九日

一立會退蔵三右衛門出席次郎左衛門小頭守衛門其右衛門掛忠之丞仙蔵同心出入関根養介　塩野此介

惣年寄
逸見与一左衛門
月行司
新町年寄
藤次郎

京都相国寺門前九軒町
山城屋
喜兵衛
付添
嘉四郎

右之者共今五時過召出掛三右衛門左之通申達ス

京都相国寺門前九軒町

山城屋
喜兵衛

此度當領分和江村太右衛門を相手取田地之義ニ付願候付相手太右衛門并壷屋六左衛門呼出再應吟味之上申口并口上書之趣為申達候處證文ハ何様ニ有之候とも右六左衛門へ相對之義者元銀差戻候ハゝ何時ニ而も差戻シ呉候約条ニ而互ニ得心之上地頭役人之書付新屋方ニ残置同人存生中右書付譲呉所持罷在候由且太右衛門答之儀ハ大ニ齟齬いたし候間呼出對決申付候様書付を以申置候へとも右太右衛門六左衛門義者是迄再三申聞候趣毛頭無相違旨申立候全右様之約条有之候ハゝ永代證文ニハ致間敷筈假令永代證文ニ認候とも右約条之義ハ可書加筈之處無其儀殊ニ賣主買主とも死失いたし候上者約条得心之有無片口ニ而ハ申口迫之儀ニ付假令書下致所持共外ニ證拠不相見上ハ相手方へ申付方も無之ニ付此上強而相願とも右書下致所持候訳を以願通取斗遣候儀も難致且領分限之役場ニ候得者支配を放レ御地領之もの入交候出入當所役人之上ニ而對決為致理非糺明之上裁許ケ間敷儀ハ難成筋ニ付然ル上ハ爰元ニおいてハ此上取扱方も無之ニ付右之趣返状ニも申遣間其旨相心得返翰相渡候上勝手ニ帰京可致候

二月九日

右申達畢而喜兵衛申立候ハ已前ハ高四拾石余も所持罷在候へとも右新田取立候入用ニ追々及貧窮當時ニ而ハ田地ハ少しも無御座候私義者乍恐右新田為可請戻京都へ持ニ罷出當時ハ京都住居仕罷在候處弟清五郎義者及難渋母養育も難成私方引取罷在候得とも母引取候義難渋ニハ不存候へ共其方新田と御座候御書下反古ニ成候ハゝ不及是非候へとも今日ゟ新屋跡ハ退轉可仕義之旨申之ニ付

遠路罷越候事故可成義ニ候ハゝ申付方も有之候へとも相手方へ申付方も無之段為申聞差戻ス

返書左之通

御切紙致拝見候然者其御地相国寺門前九軒町山城屋喜兵衛儀當領分丹後国加作郡和江村百姓太右衛門相手取田地不差戻儀ニ付願出度旨御添状之儀相願各様ゟ御紙面之趣致承知候則去子十二月廿三日喜兵衛願出候付相手太右衛門呼出返答書申付再應致吟味候處返答書之趣無相違旨申之右田地永代賣之證文差出候付六左衛門与申もの引合有之相糺候處申口致符合永代賣無紛相見候上ハ難成願与奉存候付其段喜兵衛江為申達候處同人追願書差出候付相手太右衛門并六左衛門とも相糺候處銘々書付差出候付則喜兵衛へ為申達候處尚又答書差出候付致一覧候處證文ハ如何様ニ有之候とも右六左衛門江

相對之儀者元銀差戻候ハヽ何時ニ而も差戻呉候約条ニ而互ニ得心之上地頭所6之書付新屋方ニ残し置候儀之由且太右衛門答之趣大ニ齟齬いたし候付對決申付呉候様申立候へとも假令六左衛門へ右様之約条いたし置候とも賣主買主共死失之儀其上右躰之約条有之候ハヽ永代證文ニハ認間敷哉且ハ其訳書入置候筈ニ可有之哉之處無其儀喜兵衛申立候趣申口迫之儀迚も決着可致儀とも不被存殊ニ御他領之もの對決為致候儀者難成義ニ付此上當所ニ而可相済儀与者不被存候付其旨喜兵衛へ達ス則太右衛門返答書并永代證文喜兵衛願書太右衛門六左衛門口上書喜兵衛答書等写掛御目ニ申候此段宜被仰上尚思召も御座候ハヽ被仰聞可被下候右ニ付此度喜兵衛并付添人嘉四郎罷帰候付如此御座候以上

牧野内匠頭内
寺井三右衛門印
寺田退蔵印

二月九日

神尾備中守様御組与力
石嶋五三郎様
加納萬五郎様
上田弥右衛門様
神沢粂之助様

平塚表十郎様
松平伊勢守様御組与力
飯室助左衛門様
真野八郎兵衛様
不破伊左衛門様
入江吉兵衛様
本多祐次郎様

猶以喜兵衛儀旧臘願書差出相手方返答書申付候處及月迫候付双方引取去月廿七日喜兵衛罷出候付双方取調日数相掛リ候儀ニ御座候且相手方之者ニ御用も御座候ハヽ差出可申候間此段承知可被下候以上

神尾備中守様御組与力　牧野内匠頭内
石嶋五三郎様　寺田退蔵
松平伊勢守様御組与力　寺井三右衛門
飯室助左衛門様

（封）三右衛門印

但白木状箱入上書同様認同一袋ニハ不相成候へ共左之写帳面等ニ而大封ニ相成箱難合ニ付箱厚紙ニ而封シ上書又同様認封目ニ封ノ字記ス

喜兵衛願書幷書付
和江村太右衛門返答書
永代賣買證文
喜兵衛追願書　　写
太右衛門口上書
本町六左衛門口上書
喜兵衛答書

（朱書）「被差紙横書」

但喜兵衛願書ヨリ同人答書迄右帳面上書之通順ニ繕本紙有之ニ付内訳略ス且當テ所ハ不残不認右帳面封シ左之通

願書返答書写

（封）三右衛門印

右之通仕立公事方被差出候間惣年寄呼出喜兵衛江相渡候様可申達旨三右衛門小頭共江申達相渡候

同日　　和江村　太右衛門

右之もの今九時召連可罷出者也

二月九日公事方印

御用宿
竹屋町
忠左衛門

本町
上野六左衛門

達儀有之候間今九時可被罷出候以上

二月九日

但別申紙ニ而掛リ〻申達ス

和江村年寄
吉左衛門
同村
太右衛門
右宿
忠左衛門

京都相国寺門前九軒町山城屋喜兵衛田地之儀ニ付其方へ相懸ル一件再應吟味之上喜兵衛願之趣者難成義ニ付其旨申達シ被差戻候依之最早御用も無之間其旨相心得勝手ニ帰村可致

本町
上野（ツホヤ）六左衛門

右同断ニ付其方も引合有之再應及吟味候處喜兵衛願之趣ハ難成義ニ付其旨申達被差戻候依之最早御用も無之間其旨可相心得

右之通今九時公事方へ呼出次郎左衛門申達差戻ス
丑(二月)□□十五日

右山城屋
喜兵衛
付添人
嘉四郎

右之ものとも今朝致出立候旨御用宿楠右衛門届出候与次郎左衛門被申出候

一　喜兵衛願書　壱通
一　同人差出候書下写　壱通
一　太右衛門返答書　壱通
一　同人差出候永代賣買證文写　壱通
一　喜兵衛追願書　壱通
一　太右衛門口上書　壱通
一　本町六左衛門口上書　壱通
一　喜兵衛答書　壱通
右八通壱包
一　太右衛門返答書扣　壱通
一　喜兵衛ゟ由良村源左衛門江相懸り願書差出候得とも添状ニ源左衛門儀者不申来候付其之段為申達差戻候願書写
一　右ニ付京都与力衆ゟ之添状　壱通
一　右与力衆ゟ同所御留守居代へ郡奉行名前向合書状　壱通
一　右ニ付御留守居代ゟ書状　壱通
以上

右之通一件封置
文政十二己丑年二月

寺田退蔵
寺井三右衛門

（三阪佳弘・居石正和）